

干寶「搜神記」の編纂（上）

小 南 一 郎

はじめに	一
第一章 無鬼論	四
第二章 干寶——時代と生涯	元
一 西晉時期	三〇
二 晉紀	四
三 招魂葬議	三
第三章 搜神記——構造と理論（以下、次號）	三
第四章 怪異の意味	三

はじめに

魏晉南北朝時期には、志怪小説と呼び習わされている記録や筆記作品が、少なからざる數で産み出された。この一類の作品は、怪異に関わる事件を記録することを主要な内容としており、現實にはあり得ない事がらがそこに記されているということから、現在の文學史では、これらを小説というジャンルに歸屬させているのである。確かに、その中に記録されている事件の内容には、たとえば、蒲松齡「聊齋志異」など、明清時代の怪異小説作品の中に集められたものと、基本に

なる筋書きの點で重なる例が少なくない。しかし、不思議なできごとに對する、魏晉南北朝の人々の意識は、同様に怪異を盛んに語った明清時期の小説類の編著者や讀者のものとは大きく異なっていたと考えられる。明清時期の人々の怪異に對する姿勢は、いわば餘裕のあるものであつて、怪異の存在をまったく否定はしないにしても、そうした事件を一種の寓話として語り、また楽しんで聞くことができた。そうした中から産み出された怪異の物語りを小説と呼ぶことについて、大きな異議はないであろう。それとは對照的に、魏晉南北朝時期の人々にとって、怪異の出現は、眞劍に相い對すべき事件、それも濃厚に社會的、政治的な意味を備えた事件なのであつた。怪異の記録もまた、決して興味本位になされたのではなかつた。當時の人々にとって、これら怪異の記録が歴史書的一種だと意識されていたことは、同時期の圖書目錄類において、この一群の作品の多くが史書の中に分類されていることから窺われるのである⁽¹⁾。

特定のジャンルの作品が、ある一つの時代に集中して産み出されるという現象が見られるとき、その根本の原因は、そうした作品に共通する形態とそこに盛られる内容とが、その時代に特有な社會のしくみや人々の價值觀を結晶化して表明するのに適合していることにあつたと考えることができる。魏晉南北朝時期の人々が、怪異の記録を編纂して書物に纏め上げることに特に熱心であつたのも、こうした作品を通して、當時の人々の精神のありかたを典型的な形で定着することが可能であつたからだと考えられるのである。もしそうであるならば、志怪小説と呼ばれる諸作品に定着されている、魏晉南北朝に特有の社會のしくみや人々の價值觀とは、どうしたものであつたのだろうか。この小論では、志怪小説の中でも、もっとも早い時期に屬する作品の一つであり、また、内容の點でも、このジャンルの作品群を代表できる特質を備えた、干寶の「搜神記」を取り擧げて、そこに反映されている、當時の人々の意識を抽き出し、この時期に志怪小説と總稱される作品が數多く編纂されたことの意味を考えてみようと思うのである。

280	武帝 太康元年	（吳：天紀四年）3月、吳の孫皓が晉に降伏、建業を秣陵と改稱
284	太康五年	閏12月、杜預が死去
290	太熙元年	4月、武帝が死去、惠帝が即位
	惠帝 永熙元年	楊駿が惠帝を輔佐し實權を握る
291	元康元年	賈后が楊駿を殺し、賈后の專制が始まる 八王の亂が始まる
297	元康七年	陳壽が死去
300	永康元年	4月、趙王倫が賈后を殺し、張華もまきぞえで死ぬ
303	太安二年	張昌の將の石冰が揚州の各地を攻めて占據 陵機兄弟が殺される
304	永興元年	成都王穎が丞相に、東海王越が尙書令となる
305	永興二年	王導が琅邪王睿の司馬となる 陳敏が江南割據を目指して兵を擧げる
306	永興三年	東海王越は兵を長安に進め、太傅、錄尙書事となる
	懷帝 光熙元年	11月、惠帝が死去、懷帝が即位
307	永嘉元年	7月、琅邪王睿が都督揚州江南諸軍事として建業に入る 東海王越はみずから丞相を名のり權力を握る
310	永嘉四年	東海王越は兵を率いて洛陽を出、項に軍を置く
311	永嘉五年	1月、巴蜀の流民が杜弢を押し立てて反亂を起こす 3月、司馬越が死ぬ 4月、石勒が司馬越の柩を焚やす 6月、劉曜が洛陽に入り、懷帝を平陽へ拉致する
312	永嘉七年	劉聰が懷帝を殺害、愍帝が長安で即位 建業を建康と改稱
	愍帝 建興元年	愍帝は司馬睿に北伐を命じるが、司馬睿は應じない
315	建興三年	杜弢が敗死 陶侃と王敦の關係が悪化し、陶侃は廣州刺史に
316	建興四年	11月、愍帝が劉曜に降伏、平陽に拉致される
317	元帝 建武元年	3月、司馬睿が晉王となり、改元 11月、史官を置き太學を建てる 12月、劉聰が愍帝を殺害
318	太興元年	3月、司馬睿が即位（元帝） 招魂葬を禁じる
321	太興四年	周易・儀禮・公羊博士を置く 周訪が死去
322	永昌元年	王敦が武昌で兵を擧げ、江を下って石頭城に入る 閏11月、元帝が死去、明帝が即位
323	明帝 太寧元年	王敦は姑熟に本據を移し、揚州牧を名のる 王導が司徒となる
324	太寧二年	7月、王敦が病死
325	太寧三年	閏7月、明帝が死去、成帝が即位 庾太后が臨朝、庾亮が握權
327	咸和二年	蘇峻と祖約が庾亮討伐の兵を擧げる 庾亮が逃亡
328	咸和三年	蘇峻の兵が建康に入る 陶侃らが蘇峻を殺す
334	咸和九年	陶侃が死去
336	咸康二年	3月、散騎常侍の干寶が死去
339	咸康五年	王導が死去、庾亮が司徒となる

第一章 無鬼論

「世說新語」排調篇には、次のような挿話が載せられている。⁽²⁾

干寶は、劉眞長に對し、彼が著わした「搜神記」について、その内容の大略を説明した。劉眞長が云った、「あんたは、鬼（鬼神）の董狐といえよう」と。

この挿話は、「鬼の董狐」ということばの典據として、よく知られている。董狐は、云うまでもなく、「春秋左氏傳」宣公二年の見える晉國の史官で、史筆をふるって權力者の責任を容赦なく追求し、孔子から良史（優れた史官）だと褒められた人物のことである。東晉時代の半ば頃、都である建康の社交界で華やかに活躍していた劉惔（字は眞長）が、干寶の「搜神記」の編纂に對して、あんたは鬼神の世界のできごとを筆を曲げることなく記した、立派な史官だと評したというのである。

この挿話が「世說新語」では排調と題された篇に收められていることから知られるように、劉惔は、干寶の「搜神記」編纂を正面から肯定的に評價したのではなかった。鬼神の世界のできごとと眞面目に相い對しようとしている干寶に對して、非本質的な問題を實直に追求していて、まことにご苦勞さんと「排調」した（いささか意地悪く揶揄した）のだと、この挿話を語り傳えた當時の人々は理解していたのである。

劉惔は、當時の貴族たちが盛んに行なっていた哲學議論——玄談・清談——を代表する人物であつた。司馬昱が帝位について簡文帝と呼ばれるようになる以前のこと、自身も「玄言」をよくした司馬昱のサロンにおいて、劉惔が、上賓として遇され、王濛とともに「談客」として活躍したことが、「晉書」劉惔傳に見える。「世說新語」品藻篇には、そうした哲學議論において、言葉の美しさでは王濛の方がまさるが、劉惔には議論の鋭さがあると、王濛自身が評していたと記

されている。また「晉書」王濛傳によれば、當時まだ會稽王であった司馬昱は、孫綽と一緒に「風流人」たちの格付けを行なったことがあったが、その際、筆頭に挙げられたのが劉惔であったとされているのである。このように、劉惔は、この當時の貴族たちのサロンで活躍し、貴族文化をその一身に體現する人物なのであった。

この劉惔が淫祀を嫌ったことについては、「世說新語」德行篇に載せる、次のような挿話が、印象的に傳えている。⁽³⁾

劉尹（劉惔）が、赴任さきの郡にあって、危篤におちいり、死を目前にした時のこと、郡の役所の外庭で「彼の延命のため」神を祀って音楽を奏し舞いを舞っている音を耳にすると、顔色を厳しくして云った、「淫祀を行なつてはならぬ」と。外向きの者たちから、車に着けている牛を殺して神に祈りたいとの申し出があると、眞長（劉惔）は云った、「わたしは、「内心において」かねがね神に祈ってきた。これ以上、煩わしいことをするのはない」と。

このように、劉惔は、一種の合理主義思想によって、淫祀を拒否しようとしていた。清談に巧みであった劉惔は、「易」の繫辭傳に見えるような、形而上の、哲學的な存在としての鬼神を否定はしなかったであろう。しかし、淫祀の對象になっているような、人々の祈りに應えて直接に利益を與えたり、あるいは機嫌を損ねると災厄をもたらすといった鬼神の類の存在は認めようとしなかったのである。干寶の「搜神記」に集められているのは、云わば形而下の存在としての鬼神に關する物語りであり、それは淫祀の對象となる鬼神と共通するところの多いものであった。それゆえ、劉惔が、干寶の著作活動に對して、不同意の氣持を秘めつつ、揶揄したのは、當然のことであつたとも云えよう。

しかし、こうした心情的な行き違いは、單に干寶と劉惔との間の、鬼神という存在に對する個人的な考え方の違いにもとづくというだけに止まらない意味をもっていたと考えられる。本當に、二人がこのような會話を交わす機會があつたかどうかについては、現在となつては確かめようもないであるが、こうした會話を交わしたのだとする挿話を傳えた人々は、二人の鬼神觀についての行き違いの背後に、より大きな、階層的な對立感情とでも云うべきものを讀みとっていたのだと

推測されるのである。

兩者の行き違いの背景には階層的な對立感情があったなどと、いささか大げさなことを云ったのは、次のような事實を根據にしている。すなわち、志怪小説の中には、しばしば『無鬼論』をめぐる物語りが載せられている。それは、單に皮肉で興味深い物語りであつたので、いくつもの作品に採録されたというに止まらない、思想的な對立、さらには階層的な對立感情を背後に秘めていたと想像されるのである。『無鬼論』をめぐる物語りは、登場人物の名前はいろいろと變化するのであるが、その基本的な筋書きはみな同じで、次のような要素から成り立っている。

あるところに無鬼論（鬼神は存在しないという議論）を主張する、哲學議論に巧みな人物がいた。そこへ見知らぬ客人が訪れて来て、二人は鬼神の有無について議論をする。訪れて来た人物は、鬼神は存在するという主張を展開したのであるが、無鬼論を主張する主人公の巧みな辯舌に言い負かされてしまう。議論に破れた客人は、去るに際して、「あなたは、鬼が存在しないという主張で議論には勝ったかも知れないが、實は自分こそは鬼なのだ」と云つて姿を消した。

こうした筋書きの『無鬼論』物語りは、特に東晉時期に編纂された志怪小説類にしばしば採録されている。たとえば、現行の二十卷本『搜神記』の卷十六には、次のような物語りが見える。この條が、本當に干寶が編纂した原本の『搜神記』に含まれていたかどうかについては、嚴密に云えば、それを確かめることが困難である。しかし、少なくとも、宋代あるいはそれ以前の『搜神記』のテキストの中に含まれていたであろうことは、ほぼ同文の一條が、『太平廣記』卷三二三に『搜神記』の文として引用されることから確かめられる。

吳興出身の施績は、尋陽の督となつたのであるが、彼は議論に巧みであつた。彼の門生に、同様に道理を辯ずることに長けた者がいて、常々、無鬼論を主張していた。あるとき、ひとえの上衣を着け白い袴あはせをはおつた人物が訪れて来て、二人は議論を交わし、その議論は鬼神の有無に及んだ。議論は長時間にわたり、結局、訪れてきた人物の方が

議論に敗れた。そうすると、その人物が云った、「あなたは言葉は巧みだとはいえ、道理の點で不十分です。わたしこそは鬼でありますのに、なんで鬼がないなどと云われるのか」。そこで尋ねた、「鬼がなんのためにやって來たのか」。答えた、「命令を受けて、あなたを捕まえに來ました。明日の朝がその期限です」。門生は、なんとか見逃して欲しいと、言葉を盡くしてたのみこんだ。鬼が尋ねた、「あなたとよく似た人物がいるであろうか」。門生が云った、「施續の帳下都督は、わたしと似ています」。そこで二人して都督のもとにゆくと、「門生は」都督と向かい合つて坐つた。鬼は、一尺あまりの鐵の鑿くわを手に持つと、それを都督の頭にあてて、槌でもって打つた。都督が云った、「頭がかすかに痛い」。しだいにその痛みが激しくなり、間もなく死んでしまった。

この條では、無鬼論を主張する書生のもとに鬼が尋ねて來て、その鬼を無鬼論で論破するという物語りと、冥府へ連れて行かれるはずの人物が、やって來た使者に頼みこんで、別の人物を身代りにするという物語りと、元來は必ずしも密接に關連していなかつたであろう二つの物語りが、一つにして語られている。その結果、無鬼論によって鬼神自身を論破するという皮肉な筋書きの方の印象は、いささか薄められているように見える。

同様の物語りは、「太平御覽」卷八八四に引く「續搜神記」にも見える。内容は、上に引いた「搜神記」と同一であつて、ただ文章がいささか簡略化されている。この「續搜神記」と「搜神記」との關係、あるいは、陶潛が編纂したともされる「搜神後記」と「續搜神記」との關係については、まだ十分には解明されていない。

無鬼論をめぐる同様の物語りは、また「裴氏語林」にも見える。「裴氏語林」は、東晉時代の中ごろに、裴啓が編纂した逸話集である。

宋岱は、青州刺史となると、淫祀を禁じた。「それとともに」「無鬼論」を著わしたが、精緻な議論で、だれにも反論ができず、周邊の諸州もその感化を受けて「淫祀を禁じたのであつた」。そののちのこと、一人の書生が、葛布の

頭巾をかぶって、宋岱のもとを訪れ、名刺をさしだして面會を求めた。宋岱は、その書生と談じ合い、議論は無鬼論のことに及んだ。宋岱の議論が、いささかゆきづまった。書生は、そこで衣を振るって立ち上がると、云った、「あなたは、われわれへの血食（神々へのお供え）を、二十年以上も断つてきた。あなたのところには、青牛と鬚の召使がいる。それで、あなたに仕返しをすることができなかった。いま、召使は逃げて、牛も死んでしまった。今日や」と、自由にできるようになったのだ」と。言葉がおわると消え失せた。次の日、宋岱は死んだ。

この條では、宋岱の方が議論でいささか劣勢になったとされている。また、鬼神が宋岱に復讐ができなかったのは、そのもとに黒牛と多鬚の召使がいたことが原因だとしている。これも無鬼論の物語りの一つのヴァリエーションである。

劉宋王朝の皇族の一人である劉義慶は、その幕府において、おそらく配下の文人たちに命じてであろう、いくつかの書物を編纂した。そうした編纂物の一つである「幽明錄」にも、同様の物語りが収められている。主として、それ以前にあった志怪小説作品所収の挿話を再編集して作られた「幽明錄」に載っていることからして、以下の物語りも、その原記録は東晉時期にまで遡るものであったかも知れない。

阮瞻は、平素より無鬼論を主張しており、だれもそれに反論できる者がなかった。常々、阮瞻自身が思うには、自分の理論には完全無缺で、これによって幽明（かくれた世界と現實世界）を精確に辨じ分けることができるのだと。

ある日、一人の鬼が現われ、姓名を名のって阮瞻のもとを訪れて来た。挨拶が終わると、哲學議論を交わしたが、訪問者にはなかなか才があつて辯が立った。語り合うことが長時間にわたり、最後に鬼神のことが議論になった。二人は厳しい論難を交換し合い、結局、訪問者の議論がゆきづまった。そうすると「訪問者は」顔色を変えて云った、「鬼神のことは、古今の聖人や賢者たちが、そろって言い傳えているところであるのに、あなた一人がなぜ鬼神は存在しないと云われるのか。實はわたし自身が鬼であるのだ」と。そこでたちまちに姿を變じて異形のものとなり、ま

たたく間に消え去った。阮瞻は、默然とし、ひどく氣分の惡そうな様子であった。のち、一年餘りして、かれは病氣で死んだ。

ここまで、無鬼論をめぐる物語りを、ほぼ時代順にならべてきたのであるが、この「幽明錄」に至って、無鬼論物語りの背後にあった主張が、夾雜物を除かれて、明確になったと云えるだろう。その主張とは、たしかに口頭の議論では、鬼神など存在しないと論じて、相手に言い勝つことができるかも知れないが、しかし事實として鬼神の存在は否定できない。高尚な哲學談議が展開する論議とその結論とは、現實の世界と出會うとき、まったく無意味なものでしかない、というものである。

無鬼論を主張する主人公も、「搜神記」では、施續の配下の無名の書生であったのであるが、やがて青州刺史の宋岱となり、さらに竹林七賢の關係者である阮瞻へと、時代を下るほど有名人に假托されるようになっていく。特に、七賢の關係者の阮瞻が登場することになるのは、こうした物語りが大きな皮肉をこめて揶揄しているのが、清談、玄談などと呼ばれる哲學論議をしている人々であったことと無關係ではなかったであろう。貴族たちが行なっていた清談の中で、宇宙や萬物の存在論（貴無論や獨化論）、人間性の本質についての議論（才性論）、言語の表現能力をめぐる議論（言不盡意論）などとともに、無鬼論も、しばしば取り上げられる論題なのであった。

ちなみに、阮瞻は、字を千里といい、阮籍の甥で、自身も七賢の一人に數えられる阮咸の息子である。ただ、「晉書」卷四九の阮瞻の本傳にも、この無鬼論の物語りがそのまま收められているのであるが、おそらく、元來の物語りは、同じ阮氏でも、阮籍の從子である阮脩、字は宣子、を主人公とするものであったと考えられる。「太平御覽」卷八八四の引用する「世説」には、次のように記されているのである^⑩。

阮脩は、字を宣子という。鬼神の有無を論じた際に、人が死んだ後には鬼のこると主張する者があったのに對し、

阮宣子ひとりが鬼は存在しないと論じて、次のように云った、「鬼（幽霊）を見た者は、生前の衣服を着けていたと云っている。人が死んで鬼のこるといふのなら、衣服にも鬼があるのだろうか」と。議論に加わった人々はその意見に服したのであった。

この阮脩の無鬼論は、かれの獨創のではなく、後漢の王充「論衡」論死篇の、幽霊など存在しないという議論を下敷きにしていた。すなわち、王充は、たとえ死者の靈魂が人の姿を取って現われることがあったとしても、その場合は裸で現われるはずだ。なぜなら、衣服には靈魂がないのだから、衣服の幽霊が死者と一緒に現われるはずがない、と論じているのである。また「世說新語」方正篇には、阮宣子が、社（土地神）の神樹を斬ろうとして、社の本體が樹木であっても、あるいは樹木ではなかったとしても、どちらの場合でも、その樹を斬ることに問題はないという議論を展開したという記事が見える。前に見た劉惔と同様に、阮脩も淫祀的なものを好まなかったのである。

このように、志怪小説群の諸作品の中には、主人公の名前をいろいろと變えつつ、無鬼論をめぐる物語りが、いくども收められている。「搜神記」、「續搜神記」、「幽明錄」などの作品は、この時代の志怪小説を代表する作品である。ただ「裴氏語林」だけは、志人小説と呼ばれるジャンルに屬する作品であった。志人小説と志怪小説とは、その基礎にある價值觀念に大きな差があった（そのことについては、小論の結論部分で述べる）と考えられるのであるが、この「語林」は、云わば志人小説としての自覺が必ずしも明確ではなかったのであろう。それゆえ「世說新語」の編集者たちからは非難を受け、作品自體も早く失われてしまったのだと考えられるのである。^①「語林」に收められた無鬼論の物語りも、そうした自覺が不十分なことを表わす條の一つと云えようか。いずれにしろ、志怪小説と呼ばれる作品の中に、無鬼論をめぐる物語りが幾度も採録されていることは、志怪小説の諸作品がその素材を得た、現實社會の中の語りの場（中下級の官僚たちの語りの場）において、こうした物語りが好んで語り伝えられていたであろうことを示唆するのである。

このように、志怪小説に素材を提供する源泉となった語りの場においては、當時の上層貴族たちが華やかに展開している、玄談・清談などと呼ばれる哲學議論に對して否定的な雰圍氣が濃厚であつたと推定されるのである。しかし抽象的な議論の能力では、精緻な形而上學を展開する人々に太刀打ちができない。そうした人々への反感を結晶化させたものとして、無鬼論によつて鬼を論破するという、皮肉な内容の物語りが好んで語られたのだと理解できよう。ちなみに、少し時期は下るが、劉宋の范曄も、人が死ねば精神は消滅するという説を主張し、「無鬼論」を著わそうとしていたのであるが、その死に當たっては、地下で怨みをはらしてやるなどと表明したとされている（『宋書』范曄傳）。六朝時代も中期になると、知識人に對して佛教思想が大きな影響を及ぼすようになり、無鬼論と有鬼論との對立が備えていた元來の階級的な意味合いが、必ずしも明確ではなくなってしまう。范曄が「神滅論」を著わして、貴族階層に揺すぶりをかけるといった事態も出現するのである。

最初に見たように、當時の玄談の名手であつた劉惔は、干寶が「搜神記」を編纂したことを揶揄した。それに對して、志怪小説の諸作品に「無鬼論」の物語りが好んで收められているのは、そうした高尚な哲學論議をしている人々に對する、志怪小説側からの、反擊の意圖をこめた、揶揄であつたと考えられる。巧みな論議によつて鬼神の存在は否定されても、鬼神の實在は否定すべくもない。「幽明錄」の中で、議論に敗れた鬼も云っているように、鬼神については古今の聖賢たちこそぞ述べて傳えているというのが、志怪小説に関わる人々が好んで用いる論法なのであつた。

ここで志怪小説に関わつた人々というのは、後にも詳しく見るように、主として中下級の士大夫階層に屬する人々であつた。すなわち、鬼神をめぐる干寶と劉惔との行き違ひの背景には、いささか圖式的に云えば、中下級の士大夫階層と上級の貴族階層との間の對立感情があつたのである。そうした對立は、當然ではあるが、鬼神という存在をどのように把える

かという、哲學的な問題だけが争點になつていたのではなかった。その背景には、政治觀、社會觀、さらには倫理觀など多くの點にわたつての、二つの階層の考えかたの相違が存在したと考えられるのである。

清談・玄學で哲學論議を展開する人々も、鬼神の存在をまったく否定するのではなく、鬼神をもつば形而上世界にのみ關わる存在だとしていたであらうということは、前に述べた。鬼神の有無をめぐる論争は、押し詰めれば、形而上的世界をどのように把えるかという問題であり、その形而上的世界をどのように把えるかは、他方では、政治觀や社會觀にも關わる問題でもあった。干寶は、かれが編んだ「周易注」の中で、次のように論じている。

天地が創造される以前にも存在するものはあつた。「しかし」ここで、天地が存在するようになって以後だけに議論の範圍を限つたのは、天地がまだ存在していない段階のことは、聖人も論じられなかつたからである。だから、聖人が「周易を作るに際して觀察した」天地の原理の表象も、みな天地が存在するようになって以後のものなのである。「老子」には、「混ぜ合わさつてできたものが、天地に先立つて生まれていた。わたしはその名前を知らない。強いてそれにアザナを付けて『道』というのである」といい、「易」の繫辭上傳には、「法るべき原理の表象として、天地を越えるようなものはない」といい、「莊子」には、「天地の外のことについて、聖人は、そのままにしておいて、論じることほしない」といい、「春秋穀梁傳」には、「知ることでできないものを知ろうとはしないという態度こそが智なのである」と云つてゐる。しかるに現在の、末世の浮華の學問は、道義を本質とする「儒家の」學問を強引にメチャクチャにし、求めて虚妄な領域に入りこもうとしてゐる。その結果として、政治を傷つけ、民衆に害を與えてゐるのである。「尚書」にいう「惡意ある言論が正しい人々の行ないをだめにする」という狀況が、現状なのであつて、舜帝が嫌惡したのと同様の事態ではなからうか。

ここで、天地が存在する以前のことまで論じようとする、「後世の浮華の學」と呼ばれているのが、もつば形而上的

領域を議論の対象とする清談・玄學を指して云っていることは確かであろう。鬼神を宇宙の原理としては議論するが、形而下の領域には鬼は存在しないとする「無鬼論」も、玄學で好んで取り上げられる論題の一つなのであった。しかし、問題の本質は、鬼神が本當に存在するかどうかの論争にあるのではなかった。「尙書」舜典篇の「讒說殄行」（讒佞の説が、君子たちの行ないをダメにする）という句が引用されているように、主張の内容や學問の方法それ自体ではなく、そこから派生する政治的、社會的惡影響が懸念されているのである。干寶が、知るべからざるものとして、取り上げるのはむしろ有害だと考える領域のことを、口先の議論で、さも分かったように論じる、當時の玄學のありかたが非難されるのは、そうした、求めて虚誕の領域を探究したがる議論が、單に「道義の門」たる儒家の學問傳統をメチャクチャにするのみならず、それが政治を駄目にし、民衆に害を流している（と干寶が考える）ことにあったのである。

ここで簡単に、干寶の「周易注」について觸れておこう。干寶「周易注」については、「隋書」經籍志の經部易類に「周易十卷、晉散騎常侍干寶注」と著録され、それ以後、兩「唐書」經籍、藝文志から、宋代の書目にまで、いずれも十卷本のテキストが著録されている。しかし、それ以後の目錄類には、この書物の名前が見えなくなり、原本は、おそらく宋代のころに散逸したのであろう。他の書物に引用されて遺る斷片を集めて復元された、輯本の「周易干寶注」が、「玉函山房輯佚書」や「漢學堂叢書」に納められている。

「周易」は、「老子」や「莊子」と並んで三玄の一つに數えられ、清談・玄談の中で、その解釋がしばしば論題となる書物であった。清談に加わる人々が用いる「周易」の解釋の基本は、王弼の注釋に代表されるような、「易」の原理をもつば哲學的に探究する、義理易と呼ばれる流れに屬するものであった。それに對して、干寶の「周易」解釋は、象數易と呼ばれる、漢代以來の、いささか古くさい觀念や方法を基礎としていた。干寶の易學が象數易に屬するものであることを端的に示す、納甲（干支を易の八卦六爻に割り當てる）、消息（陰陽消息の觀念を易解釋に結び付ける）などの方法の易解釋への

適用の實際については、仲畑信氏に詳しい分析がある⁽¹³⁾。

干寶の易解釋の大きな特徴の一つは、卦や爻の意味を歴史の展開と結び付けて説明するところにあった。解釋の中で挙げられている歴史的事件は廣い時代にわたっているのであるが、その多くが殷周革命に關わるものであることが注目されよう。たとえば、乾の卦の各爻の解釋には、次のようにある⁽¹⁴⁾。

初九、潛^{ひそ}める龍の狀況にあつて、用いられることがない。

最初に位置するので初といい、陽が重なっているので九という。陽が初九にあるのは、十一月の時節なのであつて、復の卦に由來している。初九は甲子（納甲による説明）であり、「三統のうち」天統の正月の方位であつて、天の大きな道もそこから始まるのである。「この時には」陽は三泉（大地の底）にあり、聖徳ある者も愚俗の間にいる。これは、文王が羑^{コウ}里に捕われていることに對應する爻である。聖明の徳を備えていても、時代の中で用いられることがない。だから「爻辭に」用いるなしと云うのである。

九二、龍が田（農田、獵場）に姿を現した。大人に會うのが良ろしい。

陽が九二にあつて、十二月の時節にあたり、臨の卦に由來している。二は、地上を意味する。田は大地の表面にあつて、人がそれに働きかけて、收穫を擧げるものである。陽の氣が働きを表わそうとし、聖人も世の中に姿を現わそうとする。これは、文王が羑里から釋放されたことに對應する爻である。だから大人に會うのが良いといふのである。九三、君子は終日、愼んで思いをめぐらせ、片時も惜んで努力をする。問題はない。

……これは思うに、文王が周の國にもどつて、大々的に正しい政治を行なつた時に對應する爻である。……九四、「龍は」淵で跳ねたりしている。問題はない。

……これは、武王が兵を擧げ、孟津まで軍を進めて殷の様子を窺つたが、「結局、そのまま」軍を引き上げたこと

に對應する爻である。……

九五、龍は飛んで天に昇った。大人に會うのが良ろしい。

……これは、武王が紂王に勝って、正當な王位に就いたことに對應する爻である。……

上九、龍が高く天を飛びすぎた。後悔することがある。

……軍事行動が完了すれば、武力は戦争をなくするために行使するという原則を守って「みずからも武装解除をする」べきである。もしどこまでも武力を擴充させてゆくならば、必ずや後悔することになる。

このように、乾の各爻の備える意味が、殷末から周初にかけての、文王・武王の行動と直接に結び付けて解釋されている。すなわち、干寶は、この乾の卦の場合だけに限らず、初爻から上爻へという一つの卦の生成を、歴史的事件の展開と對應させて説明することが多いのであるが、その場合、殷末周初の歴史を例に取ることが大多數を占めている。文王・武王がしばしば登場するほかに、蒙の卦では周公旦が讒言を受けた事件、未済の卦では周初の三監の亂と結び付けた解釋が加えられているのである。おそらく、干寶には、歴史の動きの基本的なパターンが、殷周革命の際に、最も良く示されているとする認識があったものであろう。

清談派が三玄の一つとして取り擧げる義理易の流れの中では、「周易」を、宇宙の生成や運動について存在論的な議論を展開した經典だと位置づけて、解釋が加えられていた。そこで用いられている論理やそこから導き出される解釋は、純粹な形而上學として、現在でもなお一定の意味を持っている。それとは對照的に、干寶が展開する、現象から直接に意味を抽き出そうとする易解釋は、現在から見れば、あまりにも強引であり、本来、結び付くはずのない、次元の異なる二つの要素を無理やり結び付けてしまったと云えるかも知れない。ただここで注意すべきは、周易についてだけでなく、後に見るように、怪異現象についても、干寶は、同様に原理的なものと現象とを強引に結び付けて解釋しようと試みているこ

とである。原理的なものと現實の現象とを強引に直結しようとするのが、干寶の基本的な方法論であったとも云えるであろう。その、いささか性急な方法論は、かれの學問が、概念の操作の中で一つの精緻な體系を作り上げることよりも、直接に政治的な有効性を求めようとするものであったことと密接に關わりあっていた。

仲畑信氏の前掲論文は、干寶の易注の基本的な性格を「歴史家の易注」と位置づけるとともに、干寶が學んだであろう、漢代の京房の易注との違いを説明するものとして、吳承仕『經典釋文敘錄疏證』が云う「干寶は過去を詳しく觀察し、京房は未來を豫知しようとした」という言葉を引用している。ただ、干寶が過去の歴史を觀察して、そこに一つの法則性を發見しようとしたのは、やはり現在の事件（それも主として政治的な事件）の解釋に、その法則を適用するための基礎作業であつたことを忘れてはならないであろう。

本論にもどつて、干寶が清談派を嫌つたのは、單に清談の中で行なわれる議論が、現實の中に根を持たない、かれから見れば、空疎な形而上學であるからだけではなかつた。そうした議論が、社會の風紀を亂し、政治にも損傷を與えていることに大きな危惧を懷いたためであつた。こうした干寶の、云わば政治的な立場は、かれが編纂した西晉王朝の年代記、「晉紀」の序論である「晉紀總論」の中でも、西晉王朝の滅亡の原因論や責任論と結びつけて、明確に表明されている。

この「晉紀總論」は、「文選」卷四九の史論の部分に收められているほか、「晉書」愍帝紀の最後に轉載され、また「資治通鑑」卷八九にも節略して引かれるなど、西晉一代の歴史の流れを簡潔に總括したものとして、しばしば引用されるものである。干寶が「晉紀」に付した論は、この「總論」のほか、同じく「文選」卷四十九に收められた「晉武帝革命論」が遺されているのであるが、それ以外にも、いくつかの論が書かれていたに違いない。劉知幾「史通」内篇、論贊第九は、史書に付けられた論贊として、最も優れるのが、干寶（晉紀）、范曄（後漢書）、裴子野（宋略）であり、それに次ぐのが、

沈約（宋書）、臧榮緒（晉書）、蕭子顯（齊書）だと云って、干寶の史論を高く評價している。

干寶は、「晉紀總論」の中で、西晉の歴史を次のように纏めている。司馬氏が魏の王朝内部で勢力を伸ばし、やがて政權を譲られて西晉王朝を建てた。建國當初には、蜀と吳とを併合して、一時の太平を謳歌したのであるが、そうした時期は短く、王朝は内部から亂れ、内亂と外寇とに對應できず、懷帝と愍帝とが劉曜によって北方へ拉致され、殺害されて、王朝は滅びた。西晉王朝があまりにも速く滅亡した原因として、干寶は次の二つの點を擧げている。

その一つは、魏に取って替わって新しい王朝を建てることを急ぎすぎたこと。西周王朝が、天下の諸侯の三分の二までの心を掴みながら、なお殷の王朝に仕えていたことと對比して、王朝を建てるための基礎となる仁を十分に修しなかったことが、西晉王朝が短期間の内に滅びてしまったことの第一の原因として擧げられている。前述のように、干寶は、歴史の展開の基本的なパターンを殷周革命時期に見ていた。西晉王朝は、その基本パターンを遵守しなかったのである。

西晉王朝衰亡の、もう一つの原因は、當時の浮華の風俗が王朝を内部から腐敗させたことである。干寶は、次のように云っている。⁽¹⁵⁾

二祖（景帝と文帝）が魏から政權の禪讓を受けるに際しては、あまりにも事を急いで、西周王朝が、天下の三分の二までを配下に納め、軍を動かすと八百諸侯がその下に馳せ参じたのであるが「それでもなお殷王朝に仕えたというように」、機が熟するのをじっくりと待つ餘裕がなかった。このように、西晉王朝は、その基礎を固めるについて、古い時代の例と同じくなかったのであり、さらに加えて、朝廷には徳の高い人材が乏しく、郷（行政組織の末端）にも信念を持った長老たちが少なかった。風俗は中庸を踏み外し、行動の價值基準も外的なものとなつて、學者たちは老子や莊子を尊んで、儒家の經典をしりぞけ、評論家たちも口先だけの議論を論が立つと評價して、みずからの言行に責任を持つといった生き方を卑しんだ。私生活では、勝手氣ままで醜惡な行爲も厭わないのが「通」なる態度だとさ

れて、信義を守るのは目先の利かぬものとされ、官位は、うまく機會を捉えて昇進することが尊ばれて、まじめにやるのは馬鹿にされ、官職にあつても、實務に關わらず、白紙に承認の判を押すのが高尚なのだとされて、一生懸命に勤める者を嘲笑した。その結果、三公は蕭机（蕭机の意味、李善注も分からぬという）などと呼ばれ、主君の發議に對して虚談などというレッテルが貼られたのであつた。劉頌はしばしば統治の根本を上言し、傳威はつねづね間違ひを正そうとしたのであつたが、二人とも俗吏だとされてしまった。……禮法も政治秩序も、このようにして崩壊してしまつたのであつた。ちょうど家が建ちかかっている時に、そのカスガイを取り去つたようなものであり、水が溜つてきた時に、堤防を決壊するようなものであり、火を大きくしようとしている時に、薪を取り去るようなものであつた。國が減びようとする時、その根幹部分が「枝葉より」先に倒れるとされるが、このような狀態を指して云つたものであるに違ひない。それゆゑ、阮籍の行動を見ることによって、禮教がどのようにして崩れていったかが知られ、庾純や賈充がやっていたことを觀察すれば、國家の指導者たちに問題が多かつたことが見て取れるのである。

このように、干寶は、阮籍たちからは白眼視されるであろう、禮教守護の立場を強調して、西晉王朝の滅亡の原因の一つを、社會的風紀の喪失に求めようとしている。政治や社會の制度自體に問題があつたのではなく、人々の風俗や心の持ち方を重視しようとしているところに、いささか古めかしい干寶の倫理的歴史觀を看て取ることができであろう。

「晉紀總論」の中には、西晉時期に、こうした浮華の習わしに心を痛めて、社會の風紀を矯正する必要があると述べた人々の名前が幾人も擧げられている。上の引用にも見えた、劉頌や傳威がそれであり、そのほか、「崇讓論」を著わした劉寔、「錢神論」を著わした魯褒なども、西晉時代にあつて、人々の生き方を正そうとした人々なのであつた。

しかし、阮籍などの行動を咎める干寶の眞意は、單に歴史的な事柄として、西晉王朝滅亡の責任がどこにあつたのかをあげつらつたものではなかつたであらう。その主眼は、むしろ、かれと同時代の東晉時期の、竹林の七賢たちの行動を引

き繼いでいるのだと標榜しつつ、『浮華』の行動に耽っている人々への批判にあったのだと推定されるのである。そのことは、たとえば、干寶の同時代人で、經歷的にも、おそらくかれと近いところを歩いていたであろう應詹（應瞻）の、同様の批判からも窺われるであろう。

「晉書」卷七十の應詹の傳には、次のようにある⁽¹⁵⁾。

應詹は、字を思遠といい、汝南郡の南頓の人で、魏の侍中であつた應璩の孫である。應詹は、幼くして父母をうしない、祖母に育てられた。年十餘りで、その祖母も身まかると、應詹は、嚴格に喪に服して身體を損ない、杖をついてやっと立ち上がれるという状態にまでなつた。こうしたことで、孝であるとの評判が高くなつた。

このように、應詹は、孝を實踐し、また『學藝文章』でも評判の高い人物であつた。荊州刺史の王澄の下で武陵などの郡を治め、西晉末年の混亂の中で、少數民族の居住民たちを含むこれらの郡の治安を保つた。鎮南將軍の山簡は、かれに督五郡軍事の任を授け、また陶侃とともに杜弢の反亂の鎮壓に當つた。東晉の元帝は、かれに建武將軍の任を授けた。のちに後軍將軍を授かつたとき、應詹は上疏をして、目前の政治的急務を論じたが、その中で、次のように云っている。

人の本性というものにはほとんど個人差がないのでありますが、その慣れ親しんだ環境によって、それぞれの個人の間の「生き方に」大きな差異が生じます。それゆえ、支配者が人々を教え導く際にも、人々が好みに流されぬよう警戒せねばならないのであります。魏の正始年間には、多くの文人たちが輩出いたしました。「そののち」元康年間以後になると、經典が輕んじられ「道」が尊ばれて、玄虛に心を致し氣ままな生活態度を取ることが大いなる「達」だとされ、儒教による政治や清廉な生き方というものは鄙俗だとされました。永嘉年間の國家の災厄も、こうしたことが原因でなかつたとは斷言できないのであります。現在では儒官が置かれてはおりますが、若者たちへの教育は不十分で、これでは人材を育てて、民衆たちの規範とならせるといふ道に外れております。どうか辟雍（國立大學）の

制度を整備して、教えの本義を尊び明らかにされ、まず貴族の子弟たちに教えを受けさせ、そののち、皇太子殿下にも、親しく釋奠（ヒョウデン）の儀禮（ヒョウレイ）（先師への祭祀）にご臨席していただきますように。そうされますとき、天下の全ての者が徳を尊び、世界の隅々までが人の世の正しい生き方を理解するのであります。

この一文で興味深いのは、正始年間（二四〇～二四八）の清談については評價的に言及されており、問題となるのは元康年間（二九一～二九九）以降のことだとしていることである。同様の見方は、清談批判派の一人である、劉弘が書いた政治的文書の中にも見ることができる。劉弘は、次のように云っているのである。⁽¹⁷⁾

太康年間（二八一～二八九）以後になって、天下はなべて無爲を尊ぶようになり、莊子・老子を議論することが高く評價されて、實務を説くことは少なくなった。

應詹も劉弘も、社會風氣の大きな變化は、西晉の武帝の末年から、惠帝の初年のころにあったとしている。東晉末の公羊學者である范寧が、正始の玄學の中心人物である何晏と王弼とを名指しして、「王弼と何晏との二人の罪は、桀王や紂王よりも深い」と云い（「晉書」范寧傳）、魏晉の社會を滅ぼしたのは正始の玄談だとする議論が、後世にまで引き繼がれるのであるが、早い段階の清談批判では、必ずしも正始の玄學は目の敵にされてはいなかったのである。

繆鉞教授の「清談と魏晉の政治」⁽¹⁸⁾と題する論文は、魏晉時代の清談を四つの時期に分けて整理し、それぞれの時期の間で、清談の性格に大きな差があったと論じている。次のような時期区分である（私見により、いささか説明を補ってある）。

- | | | |
|-----|--------|----------------------------|
| 第一期 | 魏の正始年間 | 何晏、王弼、夏侯玄ほか |
| 第二期 | 魏晉の交 | 阮籍、嵇康、山濤、向秀ほか、竹林七賢を中心とする人々 |
| 第三期 | 西晉時期 | 王衍ほか、東海王越のサロンを中心とする人々 |
| 第四期 | 東晉時期 | 劉惔、簡文帝などを含む |

繆鉞教授の時期区分によって云えば、まず最初に清談批判が出たのは、第三期の、王衍ら西晉時期の名士たちがやった清談に對してであつて、確かにそうした名士たちの政治的な無責任さが西晉王朝の滅亡の一つの原因となつたのであつた。干寶の場合には、第四期の清談の現状を見つつ、第二期の阮籍らにまで遡つて、清談批判をしたのである。さらに遡つて、正始年間の玄談が批判の中心となるのは、もう少し時期が下がるのであろう。

應詹の傳記にもどつて、そのうち、王敦が權力を欲しいままにすると、かれは、政治世界を避けて、風雅の世界に沈溺した。しかし、王敦がはつきりと晉王朝に反旗をひるがえし、明帝から、王敦への對處のしかたを尋ねられた時には、應詹は、王敦と正面から對決すべきことを説いて、みずからも軍を率いて王敦の軍の討伐にあたつたのである。

應詹は、武將でありつつ、一方では、儒教の原理によって政治と教育の革新を説いた。その際に、西晉王朝が滅びたことについて、元康年間以來の言論界における浮華の風俗に責任がなかつたとは云えないとするだけでなく、現在の東晉王朝に儒家的制度を確立して、浮華の風の再發を防ぐべきことを主張しているのである。

應詹が、西晉の末年に、陶侃とともに杜弢の討伐を行なつたことは、かれの傳記を略説したところでも述べたが、臨終の際にも、かれは陶侃に書面を寄せて、古くからの二人の交際を追懷するとともに、なお四方多難な社會情勢の中で、二人して、晉の王朝に忠節を捧げ、「幼主」（成帝）へ恩を報じたかつたと述べている。このように應詹と深い交わりがあつた陶侃もまた、當時の浮華の談論に反對する人物であつた。

「晉書」卷六六の陶侃傳は、次のようなエピソードを載せている。^⑩

陶侃は、聰明で俊敏な性格で、職務に勤めた。愼み深くして禮から大きくはずれることがなく、人たる道を守ることを好み、終日、膝を崩すことがなかつた。……部下たちの中に、談論や遊戲で職務をないがしろにする者がいると、命令を出して、飲酒や博打の道具をみな長江に投げ込み、役人や武將たちの場合には、かれらを鞭打たせて云つ

た、「樗蒲は豚飼い連中の遊びにすぎぬし、老子・莊子の浮華の説は、先王の法度に背いており、その主張も實行には移せないものだ。君子たる者は、衣冠を正して、その威儀を整えるべきであるのに、どうして頭髮をざんばらにして評判をとり、それが『宏達』な生き方なのだと標榜してよいものだろう」と。

付け加えれば、さきに引用したように、太康年間以來、老莊無爲が尊ばれて、實務が説かれることが少なくなったと云って、こうした風潮に批判的であつた劉弘も、「晉書」において、陶侃と同じ卷に傳を立てられていることから知られるように、陶侃と同様に武人として荊州で活躍し、陶侃を重用した人物であつた。應詹もまた、劉弘の指揮を受けたことがあることが、同じ傳中に見える。

次の章に見るように、干寶もまた武人の家柄で、西晉の末年には、荊州で杜弢の討伐に加わっており、應詹や陶侃とまったく無關係ではなかつたと推定される。こうしたことから考えれば、東晉の初年に存在した、浮華の風俗を匡正しようとする一連の議論は、個人的、散發的なものであるに止まらず、その背後に共通した社會基盤と人脈とがあつたと推定されそうなのである。

干寶「搜神記」の編集の背後には、『無鬼論』をめぐる論争があり、劉惔などに代表される、當時の上層社會で盛んであつた浮華の談論（玄談・清談）に對する批判の意圖が含まれていたと推定された。最初に引用した「世說新語」排調篇の中で、劉惔が「搜神記」の編集に對して皮肉な評價を加えているのも、そうした背後の意圖に鋭敏に察知した上でのものであつたと云えるであろう。

「搜神記」の編纂が、その背後に政治的意圖を潜ませていたであろうことは、この書物がまったくの個人的な著述ではなかつたことから窺われよう。すなわち「搜神記」は、直接ではないにしても、朝廷の暗黙の了解を得て公布されたの

だと考えられるのである。干寶は、この書物を完成すると、朝廷に對して紙の下賜を請うている。その際の上表文に、次のように云う。⁽²⁾

臣は、さきに、古今にわたって起こってきた、怪異や尋常ならざる事件を編集し記録に纏めたいと考え、散逸した資料を集めて、一つの筋の通ったものとしようとしたのでありますが、ひろく事件を知る者たちを訪ね、残存した記録の切れ端を「探しまわりましたところ」、それぞれの事件ごとに異説がありました。また紙や筆が十分でないところから、古紙に書き付けた部分もございます。

上奏に答えて、「いま、紙二百枚を下賜する」との詔があった。

ここで干寶が、自分が編纂したと云っている書物は、のちに見る、「搜神記序」の文章の述べるところと密接に重なり合っていることからいっても、「搜神記」であったに違いない。このような上奏を干寶がしたのは、完成した「搜神記」の原稿を淨書するための紙が、實際に乏しかったためかも知れない。當時、なお紙の供給が十分ではないという事情もあったのであろう。たとえば、干寶の同僚でもあった王隱は、父親以來、書き繼いできた晉の歴史を完成させるために、武昌にいた征西將軍の庾亮のもとに身を寄せ、紙筆を給されて「晉書」を完成したと、「史通」外篇、古今正史の條には云う。しかし、干寶が、自分の著述の内容を紹介しながら用紙を請うたのは、「搜神記」の編纂という仕事で、敕撰とまでは云えぬまでも、朝廷によって半ば公認されることを意圖したものであったのではなからうか。

たとえば、荀悦が「漢紀」の編纂を命ぜられた際には、尙書を通じて筆札が給せられたという例がある（「後漢書」荀悦傳）。また、干寶と同時期に史官であった虞預は、祕府の紙を請う上表をして、次のように云っている。⁽³⁾

祕府には、布紙三萬枚餘りがございますが、御書を書かれるにふさわしいだけの品質を備えておらず、また使用に給すべきところもございません。どうか四百枚を著作の史官に下賜されて、起居注を記させていただきますようお願い

いたします。

この虞預の上表も、かれの「晉書」(「隋書」經籍志によれば、元來、四十四卷)編纂の下準備であり、その仕事は朝廷によって公認化されることを意圖したものであったかも知れないのである。

このように、干寶の「搜神記」の編纂は、當時の社會狀況の中にあつて、政治的な意味合いの濃厚な仕事であつたと推測されるのである。その社會狀況と政治的な意味とについて、いささか圖式的に述べれば、次のように纏められるであろう。

東晉時期に玄談などを盛んに行ない、干寶たちに云わせれば「浮華」風俗を助長して、社會に害毒を與えていたのは、貴族階層の者たちとその周邊に集まる人々であつた。そうした人々が社會的にも文化的にも華やかに活躍し、ひつくるめて貴族制時代と呼ばれている魏晉南北朝時期の中でも、最も典型的に貴族的な文化を展開させたのが、東晉時代なのである。確かに表面的に見れば、この時期には貴族文化が華やかに開花した。しかし、歴史書などの表面に表われることは少ないが、そうした貴族的な生き方やかれらの政治技法に疑問を投げ掛け、それに抵抗を示す人々も、無視できない數で存在したのである。

當時のことわざに、「王と馬と、天下を共にす」(「晉書」王敦傳)とあつたように、東晉の政權は、琅琊の王氏に代表される門閥貴族階層と司馬氏の王室との連合政權であつた。しかも、貴族の勢力の方が優勢で、常に王室を壓迫する狀況にあつた。そうした社會狀況の典型的な例を、琅琊の王氏の代表者の一人、特に軍事力を握っていた王敦の反亂の中に見ることができよう。これも「晉書」王敦傳に見えるエピソードであるが、王敦が反亂を起こして都に侵攻すると、晉の元帝は、「わたしの坐っている帝位が欲しいのであれば、早くそう云ってくれば、わたしはみずから琅琊へ歸つてゆき、[軍隊を動かしたりして]人々をこんなにも苦しめることにはならなかったものを」と云つたとある。

王敦の軍隊が都の健康に入り、王敦は、朝廷の政治を牛耳った。事態は王敦に壓倒的に有利であるように見えながら、しかし結局、王敦は帝位を篡奪することができず、やがて失意の内に病死し、その勢力も討ち滅ぼされてしまう。そうした事態の推移の中からも、東晉政權の周邊に、貴族階層の専制に抵抗する勢力が根強く存在したであろうことが窺われるのである。さきに、東晉の初年に、浮華の風に反対する意見を表明した人物の一人として挙げた應詹は、その臨終に際して、晉の王室に忠誠を盡くし「幼主」に恩を報じて欲しいとの意を陶侃に傳えたのであった。王敦が失敗したことについては、琅瑯の王氏内部の不統一や、門閥貴族どうしの確執などもその要因となったであろうが、もっとも主要には、應詹など、貴族階層に對する抵抗勢力が、弱體化している王室をさまざまな形で支えて、王敦の野望をくじいたのだと考えられるのである。

王敦が、王衍の文化グループの一人として、清談をよくする人物の一人であったことについては、「晉書」の本傳に言及がある。晉の王室に對して不臣の迹の多かった、東晉後半期の權力者の桓溫も、一方では、この章の最初に登場した劉惔と親しく、また謝安と時間を忘れて「共語」する人物であった（「世說」賞譽篇）。ただ、桓溫の場合には、中原を異民族の支配下に「陸沈」させた責任は王衍ら清談派にあると發言しているのであるが。このように、東晉時期の清談派の内部では、脈々と反王室的な氣風（少なくとも、王室の存在を齒牙にもかけないという氣風）が承け繼がれていた。

それに對して、より低い士大夫階層の内部には、その動向が表面に表われることは少ないが、晉の王室を中心に結集することによって、門閥貴族階層に對抗しようとする流れがあったと考えられるのである。もちろん、東晉の皇帝自身は、たとえば、元帝のように貴族階層との融和を計ることを政治の基本方針とした者や、簡文帝のようにみずから貴族文化の中心に坐ろうとする者たちもいた。ただ、そうした元帝も、その周圍に、劉隗、戴若思などといった反貴族的政策を主張する人物を集めており、それが王敦が兵を起こす、直接の理由ともなっているのである。「晉書」卷六十九には、そう

した元帝の腹心たちの傳が集められており、たとえば、王敦の軍が京師に入り、劉隗がそれを避けて京師から出ることに
なつた時、元帝は、涙をぬぐいつつ劉隗を送り出したという挿話を載せている。この劉隗は、王氏の勢力を抑えるべきこ
とを正面から主張する人物であつた（『魏書』僭晉司馬睿傳）。元帝の意のあるところは明らかであらう。

後に詳しく見ることになるが、西晉の最末年、建興三年（三一五）十二月に、督運令史であつた淳于伯が、丞相府によ
つて斬罪に處せられたとき、その血が逆流して、二丈三尺の柱の頂上まで昇るという怪異が起つた。この事件について、
劉隗は、上奏をして、淳于伯が冤罪であると訴えるとともに、『妖』の理論を用いて、この事件の意味を説明している。
この上表があつたため、王導は、みずからがその咎を負い、解職を請う上疏をしているのである（『晉書』劉隗傳）。

淳于伯をめぐる怪異事件のことは、二十卷本「搜神記」の卷七にも見えているのであるが、その條の前後は、「搜神記」
の再編者が、『晉書』五行志（あるいは、『宋書』五行志）から材料を集めて作りあげたと考えられる部分である。それゆえ、
原本「搜神記」の中に淳于伯の事件への言及があつたかどうかについて、確かなことは云えない。ただ、劉隗が用いて、
當時の權力の中樞部を攻撃した『妖』の理論は、干寶もその著書の中で盛んに用いるところである。干寶も、司馬睿（元
帝）と王導との連合勢力の一翼に加わつてゐた。その連合勢力の中にあつて、干寶は、王導よりも、むしろ元帝側近の劉
隗に近い立場にあつたのかも知れない。^(註) 法家的な色彩の強い劉隗に全面的に賛同したのではないであらうが。

東晉時代、中下級の士大夫階層の人々の間には、現實の皇帝がどうかであるかを離れ、儒教的な理念による支配者像を掲
げて、貴族勢力に對抗しようとする強い意向が存在してゐたと推定される。干寶による「搜神記」の編纂も、そうした中
下級士大夫の政治的な意向とまつたく無關係ではなかつた。最初に挙げた、劉惔が干寶の「搜神記」編纂を揶揄したとい
う、「世說新語」が載せる挿話にも、こうした歴史的な狀況が反映してゐたと考えられるのである。

注

- (1) 小南一郎「顔之推冤魂志をめぐる——六朝志怪小説の性格」東方學六五輯、一九八三年、を参照。
- (2) 「世說新語」排調篇第二十五（テキストは、余嘉錫「箋疏」本による）干寶向劉眞長敘其搜神記、劉曰、卿可謂鬼之董狐
- (3) 「世說新語」德行第一
劉尹在郡、臨終綿懷、聞閣下祠神鼓舞、正色曰、莫得淫祀、外請殺車中牛祭神、眞長答曰、丘之禱久矣、勿復爲煩
- (4) Derk Bodde, "Some Chinese Tales of Supernatural," Kan Pao and His Sou-shenchi, HJAS. 6, 1942. ("Essays on Chinese Civilization", Princeton University Press, 1981, に再收) は、干寶と劉惔とが會話を交わしたことを事實と認めた上で、それを基礎にして、「搜神記」が書かれた年代を三四五年から三五〇年の間であったと推定している。この推定年代は、あまりにも晩すぎるであらう。むしろ、干寶と劉惔との間にやりとりがあったとするのは、鬼神に對して異なつた考えを持つ二人の代表者どうしを對決させてみようという意圖に出た、虚構であつたと理解すべきなのかも知れない。
- (5) 「搜神記」卷十六（「廣記」卷三三三）
吳興施續（續）、爲尋陽督、能言論、有門生、亦有理意、常乘無鬼論、忽有一單衣白袷客來、與共語、遂及鬼神、移日、客辭屈、乃曰、君辭巧、理不足、僕即是鬼、何以云無、問、鬼何以來、答曰、受使來取君期盡明日食時、門生請乞酸苦、鬼問、有人似君者否、門生云、施續帳下都督、與僕相似、便與俱往、與都督對坐、鬼手中出一鐵鑿、可尺餘、安者都督頭、便舉推打之、都督云、頭覺痛微痛、向來轉劇、食頃便亡佚文で見るとき、「搜神記」と「搜神後記」（續搜神記）とがしばしば混交して區分が付かないことの原因について、豊田穰「搜神記・搜神後記源流考」（東方學報、東京、十二三、一九四一年）は、宋代のころ、「搜神總記」という、二つの書物を一つに合わせたテキストがある、
 - (7) 「裴氏語林」（周楞伽「輯注」本、文化藝術出版社、一九八八年）宗（宋）岱爲青州刺史、禁淫祀、著無鬼論、甚精、人莫能屈、鄒州威化之、後有一書生、葛巾修刺詣岱、與談、論次及無鬼論、岱理稍屈、書生乃振衣而去起、曰、君絕我輩血食二十餘年、君有青牛髯奴、所以未得相困耳、今奴已叛、牛已死、此日得相制矣、言絕而失、明日而岱亡
 - (8) 「幽明錄」（「御覽」卷五九五、六一七、八八三）
阮瞻素秉無鬼論、世莫能難、每自謂理足、可以辯正幽明、忽有一鬼、通姓名作客詣阮、寒溫畢、聊（即）談名理、客甚有才情、與言良久、末（末）及鬼神事、反覆甚苦、遂屈、乃作色曰、鬼神古今聖賢所共傳、君何獨言無耶、僕便是鬼、於是忽變爲異形、須臾消滅、阮默然、意色大惡、後年餘病死
 - (9) 趙書廉「魏晉玄學探微」（一九九二年、河南人民出版社）。特に、第十章・玄學與清談、第二節「清談的內容與範圍」を参照。玄學、清談といった言葉の定義についても、趙書廉氏の考えを採用した。
 - (10) 「世說」（「御覽」卷八八四）
阮脩、字宣子、論鬼神有無、或以人死有鬼、宣子獨以爲無、曰今見鬼者云着生時衣服、若人死有鬼、衣服有鬼耶、論者服焉
 - (11) 「世說新語」の編纂者たちが裴啓の「語林」を否定的にとらえていたことについては、小南一郎「世說新語の美學——魏晉の才と情をめぐる」（『中國中世史研究續編』京都大學學術出版會、一九九五年、所收）を参照。
 - (12) 「周易」干寶注（李鼎祚「周易集解」序卦第十一 有天地然後萬物生焉注、「纂疏」本）
干寶曰、物有先天地而生者矣、今正取始于天地、天地之先、聖人弗之論也、故其所法象、必自天地而還、老子曰、有物混成、先天地生、吾不知其名、彊字之曰道、上繫曰、法象莫大乎天地、莊子曰、六合之外、聖人存而不論、春秋穀梁傳曰、不求知所不可知者智也、而今後世浮華

之學、彊支離道義之門、求入虛誕之域、以傷政害民、豈非讖說參行、大舜之所疾者乎

- (13) 仲畑信「千寶易注の特徵」中國思想史研究十一號、一九八八年
(14) 千寶「易注」(周易集解)乾卦

初九、潛龍勿用 位始故稱初、陽重故稱九、陽在初九、十一月之時、自復來也、初九甲子、天正之位、而乾元所始也、陽處三泉之下、聖德在愚俗之中、此文王在羣里之爻也、雖有聖明之德、未被時用、故曰勿用

九二、見龍在田、利見大人 …… 二為地上、田在地之表、而有人功者也、陽氣將施、聖人將顯、此文王免于羣里之日也、故曰利見大人
九三、君子終日乾乾、夕惕若厲、无咎 …… 此蓋文王反國、大釐其政之日也

九四、或躍在淵、无咎 …… 此武王舉兵、孟津觀變而退之爻也
九五、飛龍在天、利見大人 …… 此武王克殷、正位之爻也
上九、亢龍有悔 …… 聖人治世、威德相濟、武功既成、義在止戈、盈而不反、謚陷于悔

- (15) 千寶「晉紀總論」(文選)卷四九、「晉書」愍帝紀、「資治通鑑」八九
二祖逼禪代之期、不暇待參分八百之會也、是其創基立本、異於先代者也、又加之以朝寡純德之士、鄉乏不二之老、風俗淫僻、恥尚失所、學者以莊老為宗而黜六經、談者以虛薄(蕩)為辯而賤名檢、行身者以放蕩為通而狹節信、進仕者以苟得為貴而鄙居正、當官者以望空為高而笑勤恪、是以目三公以蕭机之稱、標上議以虛談之名、劉頌屢言治道、傳咸每糾邪正、皆謂之俗吏 …… 禮法刑政於此大壞、如室斯構而去其鑿契、如水斯積而決其堤防、如火斯畜而離其薪燎也、國之將亡、本必先顛、其此之謂乎、故觀阮籍之行而覺禮教崩弛之所由、察庾純賈充之事(爭)而見師尹之多僻
(16) 「晉書」卷七十、應詹傳
應詹、字思遠、汝南南頓人、魏侍中璩之孫也 …… 遂以孝聞 …… 鎮

- 南將軍山簡復假詹督五郡軍事 …… 尋與陶侃破杜弢於長沙 …… 詹上疏陳便宜曰 …… 又曰、性相近、習相遠、訓導之風、宜慎所好、魏正始之間、蔚為文林、元康以來、賤經尚道、以玄虛宏放為夷達、以儒術清儉為鄙俗、永嘉之弊、未必不由此也、今雖有儒官、教養未備、非所以長育人材、納之軌物也、宜脩辟雍、崇明教義、先令國子受訓、然後皇儲親臨釋奠、則普天尚德、率土知方矣 …… 詹以王敦專制自樹、故優游諷詠、無所標明、及敦作逆、明帝問詹計將安出、詹厲然慷慨曰、陛下宜奮赫斯之威、臣等當得負戈前驅、庶憑宗廟之靈、有征無戰、如其不然、王室必危 …… 疾篤、與陶侃書曰 …… 共竭節本朝、報恩幼主
(17) 千寶「晉紀」(文選)卷四九、李善注
劉弘教曰、太康以來、天下共尚無為、貴談莊老、少有說事

- (18) 繆鉞「清談與魏晉政治」(冰蘭庵叢稿)一九八五年、上海古籍出版社
(19) 「晉書」卷六六、陶侃傳

侃性聰敏、勤於吏職、恭而近禮、愛好人倫、終日斂膝危坐 …… 諸參佐或以談戲廢事者、乃命取其酒器蒲博之具、悉投之于江、吏將則加鞭扑曰、樽酒者牧猪奴戲耳、老莊浮華、非先王之法、言不可行也、君子當正其衣冠、攝其威儀、何有亂頭養望、自謂宏達耶

- (20) 千寶表(初學記)卷二、「御覽」卷六〇一、「文房四譜」卷四
臣前聊欲撰記古今怪異非常之事、會聚散逸、使同(自)一貫、博訪知之(古)者、片紙殘行、事事各異、又乏紙筆、或書故紙、詔答云、今賜紙二百枚

- (21) 虞預「請祕府紙表」(初學記)卷二、「北堂書鈔」卷二〇四
祕府中有布紙三萬餘枚、不任寫御書、而無所給、愚欲請四百枚、付著作史、書寫起居注
(22) 唐長孺「王敦之亂與所謂刻碎之政」(魏晉南北朝史論拾遺)一九八二年、中華書局

第二章 干寶——時代と生涯

前章では、干寶の「搜神記」編纂の背後には、貴族階層と中下級士大夫階層との間の思想的、政治的な對立感情が潜んでいたであろうとの推測を述べた。干寶は、後者の階層に屬しており、かれが編纂した「搜神記」の中にも、中下層士大夫たちの社會意識と生活感情とが色濃く反映されているだろうと考えられるのである。しかも、そうした階層意識は、單に干寶が個人的に「搜神記」という特定の作品の中に定着させたというだけに止まらなかった。魏晉南北朝に數多く編纂された、志怪小説と呼ばれている一群の作品には、その共通の基礎として、反貴族文化的とも呼ぶべき意識が流れていたであろうと考えられる。そのことは、それらの作品の中に、無鬼論をめぐる物語りが好んで收録されていることから推測されたのである。志怪小説と呼ばれる、魏晉南北朝時代に盛行した作品群が備える文學史的な意味は、まず第一に、當時の華やかな貴族文化の陰に隠れがちであった、中下級士大夫階層に屬する人々の社會意識や生活感情を文字に定着した點にあると云えるであろう。

しかし、中下級士大夫階層の意識や感情といっても、當然のことではあるが、これがそれだと云って具體的に示すことができるようなものではない。そうした意識は、主としてどのような生き方を選択するかといった、處世についての好惡に關わる問題であつて、それを思想的に整理し、標本化して示す時、もっとも重要な部分が枯死してしまうことにもなりかねないのである。以下に、西晉時期から東晉時代の前半時期にかけての時代を生きた干寶の生涯を追ってみるのは、單に「搜神記」の著者の經歷を知る爲だけではなく、貴族文化からいささか距離を置く人々の、社會意識や生活感情を育む源泉となったものを、當時の社會状況の中で、なるべくならば生きたままに捕えてみたいと考えてのことである。

(一) 西晉時期

干寶の生涯については、「晉書」卷八十二の、陳壽、司馬彪、王隱などといった、晉代の歴史家たちの傳記が集められた卷の中に、かれも立傳されており、これが基礎的な資料となる。加えて、吳士鑑・劉承幹の「晉書輯注」は、唐代初年に「晉書」が編集された際、その基礎となったであろう材料や異傳について、網羅的に資料を集めており、それに付け加えるところは、あまり多くない。ここでは、そうした基礎資料をもとづきつつ、西晉後半期から東晉初年という、混亂した時代と社會との中にあって、干寶がいかなる生き方を選ぼうとしたのかに視點を据えつつ、その生涯をたどってみようと思う。

「晉書」卷八十二の干寶傳は、次のようなことばで始まる⁽¹⁾。

干寶は、あざなが令升、新蔡の人である。祖父の干統は吳の奮武將軍で、都亭侯の位を受けた。父親の干瑩は、丹陽の丞であった。

この干寶傳が書かれるに際して、その基礎になったのは、何法盛の「晉中興書」であつたろうか。この冒頭の部分と重なる記述が、「世說新語」第二十五の劉孝標注に引く「晉中興書」に見えるほか、「文選」所收の干寶「晉紀論武帝革命」の李善注に引く「晉中興書」にも、現行「晉書」干寶傳に近い表現が見えているのである（その部分は、後に引用する）。なお、「晉中興書」では、干寶の祖父の名を干正と記しているが、「輯注」は、梁代の人が、蕭統の名を避けて、干統を干正と書き改めたものだろうとの推測を記している。

干寶の傳記を追う前に、かれの姓が干氏^{カン}であつたか、それとも于氏^ツであつたのかを問題にしなければならない。宋の羅大經「鶴林玉露」卷三には、次のような挿話が收められている⁽²⁾。

楊誠齋が祕書省にあった時、同僚たちと話しをしていて、話題が晉の干寶ツカホウのことに及んだ。一人の下役人が進み出て云った、「お話しになっているのは干寶で、干寶ではございません」。なぜそうだと分かるのかと尋ねると、下役人は韻書を取り出して示した。その韻書には、干の字の下に注に「晉に干寶あり」とあった。楊誠齋は大いに喜んで云った、「おまえは、わたしの一字の師だ」と。

ここで、下役人が示したとある韻書が、具體的にいかなる書物であったのかは分からない。たとえば「廣韻」には、干字の下にも、于字の下にも、干寶（あるいは干寶）への言及はない。ただ、韻書ではないが、「元和姓纂」二十五寒の部分に、「新蔡（の干氏）」、「春秋時代、宋の大夫の」干攄の子孫。晉の丹陽丞の干營は、干寶を生む。「干寶は」晉紀と搜神記とを著した」との注記があつて、この場合は、確かに干寶であつたに違いない。ちなみに、干寶の祖先だとされている干攄のことは、「春秋左氏傳」昭公二十一年に見える。

楊誠齋（萬里）といった、南宋の知識人を代表できるであろうような人物が、後世には干寶と呼ばれることが多い。「晉紀」や「搜神記」の著者を、晉の干寶だと思つていたことには注目してよいであろう。唐宋時期には、むしろ干寶と呼ばれるの方が普通であつたろうことを示唆する資料が、ほかにもいくつか見えるのである。

たとえば、「文選」の宋本系統のテキストやその李善注など、少なからざる数の書物の宋版では、明版以後のテキストでは干寶と作られているところが、干寶に作られている。あるいはまた、「唐高僧傳」卷十三の釋慧因傳には、「釋慧因は、俗姓が干氏で、吳郡の海鹽の人である。晉の太常であつた寶の子孫だ」とある。この吳郡の海鹽の地が、少なくとも唐宋時期には、干氏（干氏）と關係する土地だとされていたことは、「輿地紀勝」卷三に、「干瑩の墓が海鹽にある。干瑩は、干寶の父である」と見えることから知られるのである。

干寶であつたか、干寶であつたかを論ずることも、もし干氏、あるいは干氏が、その系譜において、どこかの興味深い

一族とつながるのであれば、それなりに意味があるであろう。しかし、我々に知られるのは、干統（正）——干瑩（營）——干寶という、前後につながりを持たない、切り離された三代の系譜のみである。そうしたことで、この小論では、ひとまず従前の習慣に従って、「搜神記」の編纂者の名を干寶と呼んで論を進めたい。ちなみに云えば、吳の孫權に殺された方術者の于吉も、干吉と書かれたり于吉と書かれたりして、干姓であったか于姓であったか、定かではない。

参考までに挙げれば、干寶自身が編纂した「晉紀」の佚文の中に、于銓という吳の武將のことが見え、その事跡を記述する干寶の姿勢はいささか興味深い。^③

〔諸葛誕は、魏にそむいて吳に投降しようとし、壽春の城に立てこもった。魏の文帝が軍を動かして壽春を包圍すると、吳の軍は、その包圍を突破して、諸葛誕を救援しようとした。しかし、壽春の城は陥落し、諸葛誕は殺された。捕えられた〕諸葛誕の部下たち、數百人は、手をこまねいたまま列をなし、その一人を斬るごとに、降伏するよう勧めたが、まったく態度を變える者がなく、最後の一人まで同様であった。人々は、こうしたできごとを「戰國時代末年の」田横の部下たちが田横に殉じて死んだ故事と同様だと評判した。

吳の武將の于銓が云った、「大丈夫たる者、主君の命を受け、兵を率いて救援に來たというのに、敵を打ち破れなかったのみならず、敵に一矢も報いられないままに終わるなどということは、わたしの取らぬところだ」。そう云うと、胃を脱いで、敵陣に突入して死んだ。

ここに記されているのは、諸葛誕が、魏から吳への逃亡に失敗し、滅亡した際に起こった、小さな挿話である。この于銓の挿話が、西晉一代の歴史を簡潔にまとめた年代紀である「晉紀」に、わざわざその發言まで引いて收録されているのは、干寶が于銓の武人的な行動に共感したことのほか、もしかすると、主人公が干寶と同じ一族に屬する人物だという縁故があったからかも知れないのである。

干寶がいつ生まれたのか、その正確な年数を定めることはできないが、西晉時代のはじめの頃であったことは確かである。その家系が、三國時期には吳國に仕えた、武人であり、中小官僚階層の家柄であったということは、記憶に留める必要のあるところであろう。おそらく干寶は、若い時代に吳國の滅亡という社會變化を経験したのである。新蔡が原籍とされているが、干寶が實際に育ったのは、恐らく長江流域の地であって、かれの思想の基礎にも、吳國系統の思想や學問の傳統があったと推測されるのである。^④

「太平御覽」卷五五六に引用する「續搜神記」や、「世說新語」排調篇の劉孝標注に引く「孔氏志怪」には、干寶の父親が死んだ時、嫉妬深かった母親が、夫の寵愛していた婢女を墓の中に閉じ込めてしまったが、干寶兄弟は幼くて、母親のやったことが良く分からなかったという挿話を載せている。もしこの記事が信頼できるのであれば、干寶は、幼くして父を喪ったということになる。この挿話は、「搜神記」編纂をめぐる因縁譚のうちの一つである。ただ、志怪小説類が記している、干寶が「搜神記」を編纂した、その動機として、かれ自身が體驗した不思議な事件があったのだとする説明（それら因縁譚については、小論第三章で検討を加える）が、どこまで信じられるのかについては、慎重な検討が必要である。

「晉書」の本傳は、續けて、次のようにいう。

干寶は、若くから學問に勵み、多くの書物を讀んだ。才能があつて役に立つということで、召し出されて「佐」著作郎となった。

「晉書」の本文には、著作郎となったとしていのであるが、周家祿「晉書校勘記」の説に従って、佐著作郎とした。干寶が、いつ、佐著作郎となったのかは不明である。ただ、あとに見るように、東晉開國の初年にも、干寶が佐著作郎として、國史の編纂を兼任したとあることからすれば、この官に就いたのは、西晉の末年に近い時期であつたろう。

著作郎は、史官の一種であり、皇帝の日々の言行を記録して起居注を作り、王朝の歴史を書く際の、基礎資料を提供す

るのも、その重要な職務であった。劉知幾「史通」外篇、史官設置第一には、著作の官の變遷を、次のように説明している。⁽⁵⁾

魏の太和年間に、始めて著作郎の官が設置されて、その職務は中書に屬していた。その官職は、周代の左史（主君の行動を記録する史官）に當たるものである。晉の元康の初年には、かわって、その職務は祕書に屬することになった。著作郎が一人。これを大著作と呼んで、史官の職務全體の統括に當たる。そのほかに佐著作郎八人が置かれた。宋齊以後には、佐の字を作の下に付けて呼ばれるようになった（すなわち、著作佐郎と呼ばれた）。古くからの例として、佐著作郎の職務は、廣く史料を收集することにたずさわり、正郎（すなわち、著作郎）は、そうした史料を用いて、傳を書いた。もし著作郎、佐著作郎に失策があつた場合には、祕書監がその責任をとるのである。その才能が史書を著わすに十分で、學問が文と史との雙方に通じている者がおれば、他の官職にありつつも、著作を兼任するものがあり、さらには祕書監となつたあとも、もとどおり著作郎の職務に當たる者すらあつた。西晉の華嶠、陳壽、陸機、束皙、東晉の王隱、虞預、干寶、孫盛、劉宋の徐爰、蘇寶生、梁の沈約、裴子野——こうした人々が、史官の中でも特に優れた者で、著作の官職にもっともふさわしい人材であつた。

六朝時期の學問は、佛教や玄學の影響もあつて、形而上學の部面で新しい成果を挙げたのであるが、そうした中であつて、あまり振るわなかつた傳統的な學問のうち、ただ史學においてだけは、優れた人材が多數輩出している。干寶もまた、六朝時期の才能ある史官の一人として、その名が挙げられているのである。

干寶は、單に、史官に任ぜられるに足る學識と文章力を持って、一つの主張を備えた史書を編纂しただけに止まらなかつた。かれが、西晉末年の社會の混亂の中で、政治的、軍事的にも活動をしていただろうことを窺わせる記事が遺っている。「晉書」卷六十一、華軼傳には、次のような逸話が見えるのである。⁽⁶⁾

華軼は、あざなを彦夏といい、平原郡の人で、魏王朝の太尉であつた華歆の曾孫である。祖父の華表は太中大夫、父親の華潸は河南府の尹であつた。

華軼には、才能と積極性とがあつて、當時、その名が世に知られていた。……永嘉年間には、振威將軍や江州刺史を歴任した。この時期、世の中は壊滅的な混亂に陥っていたが、華軼は、變わることなく典禮を重んじ、「自分の役所に」儒林祭酒を置いて、正しい道の教えを廣めることに努めた。……當時、洛陽の朝廷はなお存在していたことから、元帝（司馬睿、當時はまだ琅琊王）の命令書には従えないという態度を取つた。郡や縣からは「琅琊王の指圖に従つたほうがよいとの」諫めの意見がたくさん出されたが、華軼はそれを聞き入れず、云つた、「わたしは、ひたすら詔書による命令を待っているのだ」と。

元帝は、揚烈將軍の周訪を派遣し、軍勢を率いて彭澤に駐屯し、華軼の動きに備えさせた。周訪が姑熟までやつて來たとき、著作郎の干寶が周訪を訪問して、事態の成り行きについて尋ねた。周訪が云つた、「わたしは大府（司馬睿の將軍府）の指圖に従つており、彭澤に駐留するようにとの命令を受けた。彭澤は、江州の西門とも云うべき地點だ。華彦夏（華軼）どのは、天下を憂える至誠をお持ちだが、他人から細々とした指圖を受けるのを嫌われる。このところ入り組んだ事情があつて、いささか行き違いを來たすことになってしまったのだ」と。……元帝は、政治を任されることになる、おもだった役人たちの入れ換えをおこなつたが、その時にも、華軼は命令に従わなかつた。そうしたことから、司馬睿は、左將軍の王敦、都督の甘卓、周訪、宋典、趙誘らを派遣して、華軼を討伐させた。華軼について、王隱「晉書」〔御覽〕二五六は、次のように云っている。⁽¹⁾

華軼は、江州刺史となると、江南の人々の氣持ちを良く把握して、故郷を喪つた人々は、あたかも家に歸るかのよう、そのもとに身を寄せた。當時、天子は孤立して不安定な状況にあり、地方組織もばらばらになっていた。華軼

は、天下の混亂を修復しようとの氣持ちを持ち、洛陽へ貢ぎ物を獻上する使者を遣わすことを怠らず、臣下としての節を失わなかった。使者には、次のように告げた、「もし、洛陽への道が斷たれているならば、貢納物は琅琊王のもとへ運んで、わたしが司馬氏に忠誠を盡くしていることを明らかにするように」と。

このように、西晉末年の混亂の中で、華軼は、江州刺史として、江南の地にその勢力を伸ばすとともに、洛陽の朝廷への忠誠を表明していた。しかし、司馬睿が、王導らの獻策に従って、琅琊から建康（建業）へその幕府を移すと、兩者の勢力は、江南の支配をめぐって衝突することになったのである。

司馬睿から遣わされた周訪が姑熟（安徽省當塗）まで來たところで、干寶がそのもとを訪れて、事態のなりゆきについて質問したとされている。こうした記述からすれば、干寶が、この時にはまだ司馬睿の陣營に加わっていなかったことは確かであろう。あるいは、この時、干寶は、華軼の意向を受けて、司馬睿がわの意圖を採ったのであるかも知れない。想像を逞しくすることが許されるならば、華軼が、典禮を重んじ、その役所に儒林祭酒を置くといった儒家的政策を展開した際には、干寶も華軼のもとにあって、そうした文化政策の一翼を擔っていたと考えることができるのかも知れない。司馬睿は、元來、『不臣の跡』が著しく、人望を失った権力者とも云うべき、東海王司馬越の手先を務めていた。干寶が、最初、華軼の方に心を寄せるといったことは、地域的にも、政治的状況から云っても、十分にあり得たことなのである。

司馬睿の意向を受けた周訪のもとを干寶が訪ねるについても、周訪と干寶との間に、以前から、なんらかの往來があったため、特に干寶が選ばれ、『華軼の意を受けて』派遣されたのだったろうか。「晉書」卷五十八の周訪傳には、周訪の生立ちと、この前後の事情を、次のように記している。

周訪は、あざなを士達といい、汝南郡安城の人である。「その祖先が」後漢の末年に、混亂を避けて江南の地に移住し、……吳が平定されると、「故郷に歸らず」、そのまま廬江の尋陽に家を置いた。祖父の周纂は、吳の威遠將軍、

父親の周敏は、左中郎將であつた。……「周訪は」尋陽縣の功曹となつた。當時、陶侃トウカンが縣の下役人をしてゐた。周訪は、その陶侃を推薦して主簿の職に就け、友人關係を結んで、自分のむすめを陶侃の息子の陶瞻の妻にした。……元帝が江南へ幕府を移すと、周訪は命を受けて、鎮東將軍府の參軍事となつた。……まもなく「周訪は」揚烈將軍となり、千二百の兵を率いると、尋陽郡の鄂陵に駐屯し、甘卓、趙誘とともに華軼を討伐した。……華軼の軍勢が崩壊すると、周訪は、華軼を捕えて斬罪に處した。このようにして江州は平定された。……「元帝は」さらに周訪に命じて、ほかの軍團と協力しつつ、杜弢トウの討伐を行なわせた。

周訪も、干寶と同様に、その祖先が吳王朝に仕えた、武人の家柄であつた。また、陶侃の才能を認めて、引立てたのも周訪であつた。ちなみに云えば、周訪のむすめを妻にめとつたとある、陶侃の息子の陶瞻は、陶潛（淵明）の祖父の兄に當たる人物である。

陶侃は、鄱陽が原籍であるが、その本傳に、吳が平定されたあと、廬江郡の尋陽に家を移したとあつて、尋陽において周訪と知り合つたに違ひない。かれも、その父親である陶丹が吳の揚武將軍であつたとされるように、吳系統の武人の家柄であつた。元來、陶侃は、華軼の推舉によつて揚武將軍となり、その軍を夏口に駐屯させていたのであるが、周圍の人々の勧めもあつて、華軼の能力を見限り、司馬睿がたに付くことになる。そうした決意をする際には、周訪の助言もあつたものであろうか。陶侃と行動を共にしたのかどうかは確かめられないが、干寶もまた、華軼の勢力の將來の暗さを見通して、司馬睿がたに鞍替えをしたのであろう。

さらに付け加えれば、干寶は、元帝の遣わした周訪が姑熟まで來たところで、そのもとを訪れている。その地理的狀況から考えれば、この當時、干寶が建康にいなかったことは確かであろう。新蔡の故地を離れた干氏一族も、周訪や陶侃と同様に、尋陽のあたりに家を置いていたのではなからうか。あとに見るように、尋陽の南山に住む隱者の翟湯が、干寶と

親戚關係にあったとされていることも、この推測をいさかかは支えるであろう。

「晉書」干寶傳は、續けて、次のように云う。

杜弢の平定を行ない、功績があつて、「干寶は」關内侯の爵位を受けた。

この杜弢の討伐は、華軼を滅ぼしたあと、司馬睿勢力が、さらに湖南地域へまで、その軍事的な支配力を伸ばすことをねらつて起こされた戦役であつた。干寶も、その作戦に、武人として参加した。この時には、干寶は、すでに司馬睿の陣營に屬していたのである。

杜弢の反亂事件について、そのあらましを述べれば、次のようである。以前から、巴蜀から來た難民が多數、荊州・湘州地域に住みついていた。そうした難民たちは、それぞれの土地に古くより住んでいる住民たちから壓迫を受け、兩者の間でいざこざが絶えなかつた。そうした壓迫に耐え切れなくなつた巴蜀からの難民たちは、永嘉五年（三二二）に、一齊に蜂起をした。その際に、人望のあつた杜弢が、首領に擔ぎ上げられたのである。難民たちの蜂起軍は、長沙、零陵、桂陽など、湖南省南部の諸郡を次々と打ち破つた。永嘉六年、司馬睿勢力の中でも、その軍事的な側面を握つていた王敦が、陶侃らに命じて、杜弢の討伐にむかわせた。杜弢の討伐は、必ずしも順調に進んだわけではなく、むしろ杜弢の武將たちが陶侃らを打ちまかすといった場面も少なくはなかつた。しかし結局、建興三年（三一五）に杜弢が敗死して、陶侃は、湘州の平定に成功したのである。

「晉書」陶侃傳には、

元帝は、陶侃を杜弢の討伐にむかわせると、振威將軍の周訪と廣武將軍の趙秀とには、陶侃の指揮の下に入るようにと命じた。陶侃は、二人の將軍に先鋒になるよう指圖をした。

とあつて、司馬睿勢力は、華軼討伐の際と同様の軍事動員體制で杜弢を討伐しようとしていることが知られ、同時にまた、

この時には、周訪の方が陶侃の指揮に従うことになっていて、周訪と陶侃との上下關係が逆轉しているように見える。干寶も、この杜弢の討伐に参加したのであるが、かれ自身に手持ちの部曲（私兵）があつたのかどうかは分からない。あるいは、これまでの因縁もあり、周訪の下にあつて、間接的に陶侃の指揮を受けたのであろうか。

干寶が、司馬睿・王導の陣營に付くことになったのは、この勢力が推し進めた、舊吳國系統の人士の收攬政策の成果の一環であつただろう。陳寅恪「述東晉王導之功業」の論文は、西晉末年における中原地帯の混亂の中で、根據地を琅瑯から建康に移した司馬睿の陣營が、獨立への志向が強い吳の地域の豪族たちをみずからの陣營にとりこむため、王導が中心になって、中原貴族と江南豪族との融和政策を展開したことを論じている。江南の豪族たちが、そうした融和政策を受入れて、江南の支配を北方から來た貴族たちに委ねることになった背景には、江南地域において、土着の大豪族と中小世族との間に大きな矛盾があつたからだと指摘されていることは、特に重要な點であらう。

吳の人士の方からも、西晉の朝廷に對して、南方の人材を積極的に取り擧げるように働きかけを行なっており、司馬睿が江南に入る以前から、南北の融和策が模索されていた。たとえば、華譚が、早くよりそれを主張し、みずからも實行していたのである。この華譚を通じて、周訪と干寶とが結び付いていることは、注目してよいであらう。「晉書」卷五十二の、華譚傳には、次のようにある。¹¹⁾

華譚は、あざなを令思といい、廣陵の人である。祖父の華融は、吳の左將軍、錄尚書事であり、父親の華誦は、吳の黃門郎であつた。……太康年間に、揚州刺史の嵇紹が、華譚を秀才に推舉した。……華譚が洛陽に入ると、武帝がみずから策問を行なつた。……「武帝が」重ねて策問して云つた、「吳と蜀とは、〔長江や險阻な山岳があるという〕地形を頼んで服従しなかつたが、現在では、〔ともに〕平定された。蜀の者たちは、教化に服して、二心を懷くことがない。しかるに吳の者たちは、まっすぐには歩かず、しばしば宗教的な反亂を起こしたりする。蜀の者たちは純朴

で、教化を施しやすく、吳の者たちはスバッシくくて、すぐに事を起こすのであろうか。現在、新しく配下に入れたこれらの地域を安定させようとするとき、なにを最優先したらよいのであろうか」と。

この策問に對して、華譚は、吳の地の人材を積極的に朝廷において任用すべきだと答えている。華譚自身も、廬江の太守になると、『寒族の周訪』を孝廉に推舉しているのである。

建興の初年には、華譚は、司馬睿の幕府に入つて、鎮東軍諮祭酒となり、さらに丞相軍諮祭酒に轉じ、郡の大中正を兼任した。この際に、干寶と范珧とを朝廷に推舉し、自分自身は官から退きたいと願ひ出ている。しかし、この辭職願ひは聽き届けられなかった。

太康の初年に、祕書監となつた華譚は、晉陵の朱鳳と吳郡の吳震とが、優れた才能を備えながら官位がないのを見て、推舉し、著作佐郎の任にあてている。ただ、晩年には、元帝の側近と意見が合わず、不遇であり、王敦の亂の際に官を免ぜられて、そのまま家で死んだ。

このように、華譚は、吳國系統の人士を政治に用いるよう主張し、みずからも、中下級士大夫階層の中の有能な人物を、積極的に引き立てている。周訪も干寶も、この華譚に才能を認められ、推舉を受けた人材なのであった。

干寶は、かれが著した「晉紀」の中に、華譚について、次のような挿話を書き留めている。⁽¹⁾

「永嘉五年」、琅琊王の司馬睿は、周馥を追い拂おうとした。「この時」華譚は、周馥のもとに身を寄せていた。

琅琊王が甘卓を遣わして周馥に攻撃をかけさせることになった時、華譚が以前から甘卓と親しくしていたことから、甘卓は、使者に立つ者を募ると、城に入つて華譚のもとを訪れさせた。城に入った使者は、宿舎に行くと、「華侯は「在宅だろうか」と尋ね、「わたしは、甘揚威どのの使者だ」と名のつた。華譚自身が、「華侯の所在は不明だ」と答え、絹二疋を取り出して與えた。使者がもどつて報告をすると、甘卓が云つた、「應對をしたのが、華侯どのだ」と。

周馥については、「晉書」卷六十一に傳があり、かれも、司馬睿が江南にその根據地を移す以前に、都督揚州諸軍事、鎮東將軍として、南方で勢力を養っていた人物であった。永嘉四年に、周馥は、都が異民族の脅威にさらされていることを心配し、南方の壽春への遷都を獻策した上書を奉っている。當時、權力を牛耳っていた東海王の司馬越は、こうした周馥の存在を目障りに思い、司馬睿にその討伐を命じたのであった。

上引の「晉紀」の斷片の中で、司馬睿に對抗する周馥のもとにいた時期の華譚の行動について、干寶は、好意的な記述を留めている。もちろん、そこに、華譚の行動自體への干寶の贊同の氣持ちがこめられていたに違いない。しかし、同時にまた、簡潔を旨とする編年體の史書「晉紀」の中で、こうした些事への記述がなされている背景には、前に引いた吳將の于銓に關わる挿話の場合と同様に、挿話の主人公と干寶との間の密接な關係があつたことも一つの理由だったのでないかと推測されるのである。

（二）「晉紀」

このような、いささか曲折した過程を経て、干寶は、司馬睿・王導の陣營に加わった。その司馬睿・王導の連合勢力が根幹となつて、東晉王朝が作り上げられたのである。建康に都を定めて、司馬睿は東晉初代の元帝となり、王導は中書監となつて、この二人を中心にして、新しい王朝の制度が整えられていった。そうした東晉王朝の草創期に當たつて、干寶は、國史編纂の任務に當てられていた。その間の事情について、「晉書」干寶傳は、次のように記している。

晉王朝の中興がなつたばかりで、まだ史官は設置されていなかった。中書監の王導が上疏をして云つた、「……よろしく史官を整備されるべきであり、佐著作郎の干寶たちに對して敕を下され、國史の編纂の準備に當たらせられま

すように」と。元帝は、この意見を容れた。干寶は、この時から、國史の編纂を兼任することになったのである。

「建康實錄」によれば、干寶が國史を領するようになったのは、建武元年（三一七）年のことであつた。この年の十一月のこととして、次のように記されているのである。⁽¹³⁾

十一月、史官を置き、太學を立てた。干寶と王隱とが、國史の編纂を兼任した。

ただ、後に引用するように、「晉中興書」では、干寶は尙書郎として「國史」を兼任したのだとしている。また「史通」外篇、古今正史の條にも、尙書郎、領國史の干寶が「晉紀」を撰したとある。このように、干寶が尙書郎として國史を兼任したとする記録があるのは、干寶が、建武元年には佐著作郎として國史を兼任したのであるが、やがて尙書郎に遷つて、そのままに國史を兼任したからであらう。

上に「晉書」干寶傳を引いた際には省略したのであるが、干寶傳の中に、王導が、東晉の王朝に史官を置くべきことを主張した上疏がそのまま載せられている。その上疏の中で、王導は、次のように云っている。⁽¹⁴⁾

そもそも帝王の事跡は、すべて文字に記録され、うるわしい典範として書物に編纂されて、永遠に伝えられるのであります。「西晉の」宣皇帝（司馬懿）は、天下の混亂をしずめられ、武皇帝（司馬炎）は、魏から政權を禪讓されました。「これら先帝がたの」至上の徳と大きな勳功とは、上古の聖帝にも劣らぬものでございます。しかるに「それを記した」紀傳は、朝廷の書庫に保存されておらず、その恩徳への頌歌が器樂の演奏ために編曲されてもおりません。陛下は、聖明のご資質によって、中興の盛んな世にめぐりあわれたのでございます。よろしく國史を設置され、帝紀を撰集されて、高くは祖宗の功績を廣く知らしめ、下つては祖宗を補佐した人々の勳功を記録し、事實を正しく伝えることに努めて、後の世の據りどころとなされるべきでございます。

このような王導の主張を承けて、東晉王朝の最初期から、西晉の歴史を編纂するための準備が始められた。干寶が著し

た「晉紀」も、そうした國史編纂の準備作業を基礎にして、編まれたものであったと推定される。「晉書」の干寶傳は、干寶が著した「晉紀」について、次のように云っている。

晉紀を著した。「その内容は」宣帝に始まり愍帝に終わる、五十三年間を記述したもので、あわせて三十卷。できあがった晉紀を奏上した。その書物は、簡略で、事柄を直書しながらも事態の背後まで目配りがあり、人々は、干寶を優れた史官だと稱賛した。

ここでは「晉書輯注」のテキストにより、「晉紀」の卷數を三十卷としたが、蓬左文庫所藏の「晉書」などでは、その部分を二十卷に作っている。同じく「晉紀」の編纂のことを述べて、「文選」卷四十九の李善注に引く「何法盛晉書」（晉中興書）は、次のように云う。⁽¹⁵⁾

干寶は、あざなは令升、新蔡の人。始め尚書郎として國史編纂を兼任した。散騎常侍に昇進し、死去した。「晉紀」を著わした。それは、宣帝に始まり、愍帝にいたるまでの五十三年間のことを記述したもので、歴史事件に對する論評は、正しう射ており、人々はみな稱賛した。

干寶の「晉紀」は、上引の上疏に見えるような、王導の意向を強く反映して編纂されたであろう、編年體の史書であった。ただ、東晉王朝の公的な事業として始められた西晉史の編纂は、元來は、敕撰の史書に結實するはずであったろう。干寶が、次のような上議をしているのも、敕撰の「晉史」の體例についての提案であった（言い換えれば、直接にはかれの「晉紀」についての發言ではなかった）だろう。⁽¹⁶⁾

むかし、干寶は、「晉史」の編纂について意見を述べ、左丘明（春秋左氏傳）をモデルとし、臣下についての細かい記述は、譜注の形式にすべきだと主張した。當時、意見を述べる人々は、みなこの主張を受け入れ、それを基礎に議論をしたのであった。

こうした干寶の主張は、かれが模範とすべき歴史書として「春秋左氏傳」を高く評價していたことに由來している。劉知幾「史通」内篇、二體第二には、次のように云っているのである。⁽¹⁷⁾

晉の時代の干寶は、書物を著すと、左丘明を盛んに稱揚する一方で司馬遷を低く評價した。その書物の「義」において、「春秋左氏傳は」三十卷という限られた卷數の中で、よく二百四十年のことを纏めて記述し、遺すところがない」と云っているのである。思うに、干寶のこの主張は、みずからの信念を強く表明したことばだと云えよう。

ここに見える干寶の著書とは「晉紀」のことで、「義」とは、おそらく、「晉紀」に付けられた凡例(序例)のことなのであろう。同じく「史通」内篇、序例の條には、次のように云っている。すなわち、孔子や左丘明は、書物を著す際に、その最初に凡例を置いたのであるが、そうしたやり方は、それ以後、途絶えていた。干寶が「晉紀」を著すに際して、凡例を復活して、それが鄧粲や孫盛以下の人々が著す史書にも引き繼がれた。「史例」の中興のきっかけを作ったのは干寶なのだ。序例のほか、干寶の「晉紀」には、また論贊が付いており、それが劉知幾などから高い評價を得ていたことについては、すでに前章で述べた。

干寶の「晉紀」が、凡例などの構造的な部分だけに止まらず、その表現までも含めて、「左氏傳」にのっとっていたことについては、「史通」内篇の模範篇以下、各所にその實例を舉げて指摘をしている。干寶が模範しようとしていたのは、「左傳」の簡潔で、しかも表現の背後に深い意味を備えた表現であった。加えて、干寶が、「左傳」だけでなく、「汲冢書」(主として「竹書紀年」を指して云うのであろう)をも模範としようとしていたことも、興味深い。「汲冢書」の發見は、當時の學術界に大きな衝撃を與えた。「史通」外篇、申左第五には、次のように云っているのである。⁽¹⁸⁾

晉の太康年間(二八〇—二八九)になって、汲郡の「戰國時期の墓から、竹簡に記された」古い書物が見つかったが、その内容は全く「左氏傳」と合致していた。だから、東晉は「もしこれらの書物が漢代に出土していたならば、

「左傳を重視すべきことを主張した」劉歆も「反對派を畏れて」五原太守になることはなかった」と云ったのである。汲冢書の發見を承けて、摯虞と束皙とは、そこに記された主旨を引用して「左傳」の意味を明らかにし、王接と荀勗とは、その條文を取り上げて「左傳」の記事を證據づけた。杜預は、そうした基礎の上に立つて「左傳」の注釋を書き、干寶は、それを借りて、みずからの著述の師範としたのである。

ここで、干寶が「汲冢書」を師範としたと云っているのは、おそらく事件の記述法などについて、その簡潔な書き方を模擬したことをいうのであろう。この部分には劉知幾の原注があつて、「そのことは、干寶の晉紀序例の中に詳しく書かれている」と云うが、残念ながら、その「序例」は傳わっておらず、干寶がいかなる部分で「汲冢書」を師範としたのか、その詳しい内實は知ることができない。

なお干寶は、「晉紀」を著すに際して「春秋左氏傳」の書法から多くのものを得ていただけに止まらず、また「左傳」自體の注釋も書いていた。「晉書」の本傳に「春秋左氏義外傳をつくった」とあるのがそれであつて、この書物が「隋書」經籍志の經部春秋類に著錄される「春秋左氏函傳義十五卷 干寶撰」であるに違いない。ちなみに、本傳に「春秋左氏義外傳」とあるのは、元來は「春秋左氏義函傳」とあつたものを、抄寫、あるいは翻刻の間に字を誤つたものであるう。また、隋志の同じ類に、「春秋序論二卷 干寶撰」という書物も見えており、「春秋」に對する干寶の考えが表明されていたと推定されるが、「左氏傳」の干寶注と同様、この書物も失われてしまった。

このように、干寶の「晉紀」は、周到な準備と體系的な構想とをもつて編纂された歴史書であつた。ただ、東晉王朝の公的な事業になるはずであつた「晉史」の編纂が、どういう經緯をたどつて、少なくとも表面的には干寶の私撰である「晉紀」という形で結實することになったのか、もしその間に特別の事情があつたとすれば、そうした過程にどれぐらいの時間がかかり、「晉紀」が完成したのはいつであつたのかなどの點については、それを確かめるための、直接の資料が遺つて

いない。あるいは、「北堂書鈔」卷六八に、次のような一文が干寶「晉紀」の斷片として引用されているのが、そのことを考えるための、一つの参考となるであろうか。⁽¹⁹⁾

王導が司徒となると、西屬一人を置いて、長史を補佐して九品の參定を行なわせた。

この一段の文章が、確かに干寶「晉紀」の斷片であるとすれば、「晉紀」が完成したのは、王導が司徒となって以後のことだということになる。あとに見るように、王導の司徒府は、東晉の太寧元年(三二三)に設置されて、干寶自身も、そこに仕出しているのである。ただこの年代は、「晉紀」が記述する時代の範圍から外れており、どのような敘述の中にこの一條が含まれていたかは、確かめようがない。あるいは、同じく干寶の著書である「司徒儀注」、もしくは劉協「干寶晉紀注」などとの混同があつたのかも知れない。

干寶が編纂した「晉紀」については、「隋書」經籍志、史部古史類には二十三卷のテキストが、兩「唐書」經籍・藝文志の史部編年類には二十二卷のテキストが、著録されている。兩者の間に一卷の差があるが、これは目錄部分などを卷數に入れるかどうかの違いであつて、兩者は基本的に同じテキストであつたに違いない。なお、「新唐書」には、「干寶晉紀二十二卷」と並べて、「干寶晉書二十二卷」という書物も著録されている。干寶の「晉紀」が「晉書」と呼ばれる場合もあつたのであろうか。宋代になると、「通史」藝文略三に「晉紀二十三卷、干寶撰、訖愍帝」という記録があるのを除けば、「宋史」藝文志や「郡齋讀書志」、「直齋書錄解題」などの書目にも、干寶「晉紀」の名は見えなくなる。このころに、元來の「晉紀」は散逸したものであろう。後世、諸書に引用される佚文を集めて「干寶晉紀」を復元した輯本としては、黃奭「漢學堂叢書」所收のものと湯球「晉紀輯本」所收のものとが代表的なものである。

なお、兩唐志にはまた「劉協注干寶晉紀六十卷」という書物が著録されており、干寶の「晉紀」には、詳しい注が付けられたテキストのあつたことが知られる。「晉紀」に注を付けたという劉協について、章宗源「隋書經籍志考證」は、劉

形の誤りであろうとしている。すなわち「梁書」文苑傳には、劉昭の「後漢書」注と関連して、劉昭の伯父にあたる劉彤が「衆家の晉書の記事によって、干寶の晉紀に注をつけ、四十卷の書物を作った」と見えるのである。卷數に違いがあつて、劉協注は即ち劉彤注のことだと斷定はできないにしても、兩者が同一人物であつた可能性は否定できないであらう。梁代のころ、多數編纂されてきた晉代の歴史書を統合しようとする動きがあり、その際には、干寶の「晉紀」が統合のための基本テキストに選ばれているのである。その背後には、干寶の作品が他の晉書類よりも優れるとする評價があつたものであらう。

この劉協（劉彤）の「晉紀注」について、確かにそれであると斷定できる條文は、斷片も遺されてはいない。ただ、南北朝時期から唐宋にかけての書物に「晉紀」として引用されている佚文のうちには、その内容が「搜神記」と重なるものがあるが、それらは、もしかすると劉協注の文章であつたのかも知れない。次のような例がそれである。²⁰

「吳の武陵蠻が反亂を起こした」。武陵〔蠻〕は、長沙郡の異民族で、盤瓠の子孫である。かれらは、中央朝廷の支配下に雜居するが、山岳地帯に住んで、險阻な地形によって外からの支配を拒絶している。いつも浮かれ騒いで、魚肉を捧げ物にして盤瓠をまつる。一般には、赤髓横裙の子孫なのだと稱されている。

この一條は、「太平御覽」卷七八五に「干寶晉紀」の文として引用されているものである。ただ冒頭の「吳の武陵蠻が反亂を起こした」という一句は、湯球が付け加えたものであつて、元來の「御覽」の引用にはない。この「晉紀」の一條と重なる、武陵蠻についての記述は、現行の二十卷本「搜神記」卷十四にも見えて、元來の「搜神記」にも同様の條があつたであることは、唐宋時期の類書などが、重なる内容の斷片を「搜神記」のものとして引用していることから確かめられるのである。

この武陵蠻の生態を記述している「晉紀」の佚文は、その内容からいって、編年體の歴史である「晉紀」の中で、びっ

たり納まりそうな位置を見つけ出しにくい。それゆえ、湯球は、「吳の武陵蠻が反亂を起こした」という一句を勝手に創作して、その事件に懸ける形で、この一文を輯本「晉紀」の中に収めたのであった。もちろん干寶自身が、「晉紀」と「搜神記」との兩者に、表現が類似する文章を二度、使ってもなんらかまわないのであって、持ってまわった考えかたをする必要はないのかも知れない。しかし、もしかすると、引用されて遺る「晉紀」と「搜神記」との佚文の間に、表現まで重なる記述がいくつかあるのは、劉協が「晉紀」に注を付けるに際して、同じ干寶の撰だということから、「搜神記」を重視し、そこから取って付けた注の文章が、「晉紀」の本文だということになってしまったという推測も、まったく成り立たないわけではないであろう。

干寶の「晉紀」は、上に引いた王導の上疏の主旨を編集の基本方針として、司馬睿・王導政權の正統性を主張することを主要な目的として著された史書であった。⁽²¹⁾ そのことは、「晉紀」に付せられた干寶の「總論」が、西晉の滅亡のあと、天命は重ねて中宗の元皇帝に下されたという句で締めくくられていることから明らかである。しかし同時にまた、この史書が全面的に王導・司馬睿政權のために服務しているのではなく、その中に干寶独自の歴史觀や人間觀が定着されていたであろうことが、斷片的な佚文の記述を通して窺われるのである。

たとえば、「晉紀」の中には、西晉王朝の基礎を作った先帝たち、宣帝(司馬懿)、景帝(司馬師)、文帝(司馬昭)らに對する、特に魏王朝から政權を奪う經過についての、批判的な記述がいくつも遺されている。王朝篡奪に司馬氏が性急すぎたとする干寶の意見は、「晉紀總論」にも表明されていた。具體的な歴史事件として、たとえば、司馬懿の討伐を受けた王凌の最後について、干寶「晉紀」は、次のように記述している。⁽²²⁾

王凌は、「戦いに破れ、都に護送される途上」項の地まで来たところで、水際に賈逵の祠堂があるのを見つけた。王凌が呼びかけて云った、「賈梁道よ、王凌は、疑いもなく魏の社稷に忠なるものであったこと、あなただけが、そ

の神靈によって知っていてくれるのだ」と。「王凌は、項の地で、毒藥を服して死んだ」。その年の八月、太傅（司馬懿）は病氣に罹り、夢うつつの中に王凌と賈逵とが現われて祟り^{たた}をなすのを見て、ひどく氣分が悪くなり、そのまま死去した。

司馬懿の死をめぐる怪異事件のことは、南北朝末期の志怪小説、顔之推の「冤魂志」にも採録されることになるのであるが、干寶が「晉紀」の中にこうした怪異を記録したのについては、やはり、魏王朝への忠を貫いた王凌に心を寄せるところがあったのであろう。ちなみに、この項の地（河南省沈丘縣）は、西晉の末年に、ここで西晉の軍が石勒に敗れ、多くの皇族や高官たちが虐殺され、東海王司馬越の柩も焚やされることになる、西晉王朝にとって因縁の場所である。もちろん、干寶は、王凌の怨念がそうした事件を引き起こしたなどとは云わないが、この挿話を記録するについては、なんらかの感慨があったに違いない。

また、文帝、司馬昭が王經を誅殺した事件を、「晉紀」は、次のような表現で記録している⁽¹⁰⁾。

「尚書の王經を殺害した」。王經は、まっすぐな生き方をし、「我れ」に忠ではなかった。それでかれを誅したのである。

ここに見える「我」という表現は、干寶「晉紀」に獨特の表現であって、司馬氏、あるいは西晉王朝を「我れ」としてしているのである。この一條の表現から、忠不忠といった觀念が相對的なものであって、干寶自身は、政治の大勢に抗して、前の王朝に忠義を捧げた王經を顯彰したいと思っていたであろうことが窺われる。ちなみに、この「我」という表現もまた、干寶が「春秋」を模して用いたものであった（「史通」模擬篇を参照）。

この王經は、魏の皇族である高貴郷公と謀り、司馬氏の權力を押さえようとしたが、あえなく殺されてしまった人物であった。司馬昭の一黨が高貴郷公を殺害した事件についても、干寶は齒にきぬを着せぬ表現で、その中でアタフタする司

馬氏一味の様子を記しているのである。⁽²⁴⁾

高貴郷公が殺害されると、司馬文王は朝臣たちを集めて、事態にどのように對處すべきかを謀った。太常の陳泰は、それに出席しなかった。「司馬文王は」陳泰の妻の父にあたる荀顗を遣つて、かれを連れてこさせようとした。荀顗は「陳泰の家に」着くと、「出席するのが」身の安全のためだと告げた。陳泰が云った、「世間の評判では、わたしと舅^{あなた}とを同列に並べておりますが、今度のことへの對處のしかたでは、舅はわたしに劣るのです」。

子弟たちや關係者たちがそろつて強いたことから、陳泰は、涙を流しつつ、參内した。文王は、陳泰を奥向きの部屋に招くと、云った、「玄伯どの、あなたは、わたしがどのように對處すればよいと考えておられるのか」。答えて云つた、「賈充を誅殺して、天下に謝罪すべきでございます」。文王が云った、「それに次ぐ、別の方法を考えてはくれまいか」。陳泰が云った、「わたくしの意見としては、これよりもっと嚴しい處分はありえても、これに次ぐような處置は存じません」。これを聞いて、文王は口を閉ざした。

賈充は、司馬昭の意を付度し、その手先として高貴郷公を殺害したのであった。この一條では、司馬昭が、朝臣たちに壓力をかけつつ、こうした事態をなんとか穩便にやり過ごそうとして劃策する様子を、干寶は、司馬氏とそれに同調する人々に對してあまり同情を含まない視點で、記述しているのである。

このように、干寶は、晉王朝の史官ではあったが、西晉王朝の先祖のために忌んで、史筆を曲げることはしなかった。干寶にとって、重要なのは個人の忠なる生き方であつて、その忠がどの王朝に向けられたものであるかは問題ではなかったであろう。政治狀況によつて左右されることのない、信念を持った行動が稱贊されており、干寶自身も、史筆によつて、同様の態度を取ろうとしていたのだと云えよう。そうした干寶の歴史觀や人間觀は、恐らくは、かれの家に傳わる、吳王朝以來の武人的な價值觀を引き繼いだものであったと推測される。すでにその挿話を引用したように、吳の武將の于銓

や華譚らの、武人らしい行動を、「晉紀」は、贊同の氣持ちをこめて、記録しているのである。「晉紀」が、當時、良い評判を得たとされる、その第一の原因は、こうした骨太く、白黒が明確に判別された、干寶の價值觀がそこに定着されていたからであつたと推定されよう。

もう一つ、干寶の立場や考えがよく表明されていると考えられるのは、吳國の滅亡をめぐる「晉紀」の表現である。「史通」内篇、模擬第二八には、「晉紀」が「左氏傳」の表現を眞似たが、内容が相い反している例として、次のような條を擧げている。⁽²⁵⁾

「左傳」には、「邢は國を遷したが、それはもとの地へ歸るようであり、衛の人々は、國が滅びたことも忘れた」とある。その意味は、「大きな災難に遭つたが」上下の者はみな安堵して、昔どおりの生活を守つたというのである。「それに對して、吳の末王の」孫皓はいえは、暴虐の限りを盡くして、人々は生きたそらもなかつたのである。晉の軍隊がこれを討伐した時、「吳の人々は」自分たちが後回しにされて、早く討伐してくれなかつたことを怨むという状態であつた。しかるに干寶の「晉紀」は、「吳の國が滅びたあと、江南の人々は國が滅びたことを忘れた」と云っている。江南の人々が司馬氏の善政に安んじた様子が、ちょうど歸命侯（孫皓）が滅ぼされる以前と同じだつたというのであろうか。

ここで劉知幾がやっている上げ足取りのことはひとまず置くとして、干寶にとって（そうして干氏一族にとって）、吳國の滅亡は、特に惜しむ必要もない事件であつた。そうした認識が、「江外は亡ぶを忘る」という表現にもなつたと考えられよう。南方の中小在地世家層にとって、孫吳政權が必ずしも望ましい權力ではなかつたことは、葛洪の「抱朴子」外篇、吳失篇の記述からも窺われるところである。それに對し、陸機は「辯亡論」を著わして、吳王朝の缺陷を指摘しつつも、吳郡の陸氏と孫吳政權との一體感を強調している。江南在地の世家層の中でも、吳郡の陸氏を含めた大豪族と、干寶

や葛洪ら中小階層とでは、その政治的状況の把握のしかたに大きな違いがあったのである。

ちなみに、吳國の滅亡に關連して、これも干寶が好ましく思つて「晉紀」に納めたのであろう、次のような挿話も見える。⁽²⁶⁾

〔吳の皇族の〕孫秀は、「吳國から逃亡して」晉の朝廷にあつた。孫皓が降伏したとの知らせが入った時、群臣たちはこぞつて祝賀した。孫秀は、病氣を理由にしてそれには加わらず、南に向かい、涙を流しつつ云つた、「その昔、討逆將軍（孫權）は、年若い一校尉の身でもつて吳王朝を興された。今、後主は、江南の地の全てを投げ捨ててしまつた。宗廟も陵墓も、これがために廢墟となるであらう。悠々たる蒼天よ、孫皓は、なんという人でなしだ」と。朝廷の人々は、孫秀のこうした行動を稱賛したのであつた。

こうした一條の中にも、干寶の、いささか單純すぎると云えないでもないが、處世觀と人間觀とが表明されているのである。

これまでの通説では、干寶の「晉紀」は、東晉王朝の正統性を顯彰し、司馬睿・王導政權を強化することを主たる目的として編纂されたのだとされてきた。確かにそうした面もあつたであらう。しかし上述のように、一方では、「晉紀」の中には、干寶自身の價值觀が強く反映され、晉王朝の先王たちの事跡についても、忌む所のない記述がなされていた。元來、司馬睿・王導連合政權は、寄り合い所帶の、折衷的な性格の強いものであつて、一つの著作によつて、その全體を代表することは不可能であつたろう。干寶が、司馬睿・王導政權のために辯じるところがあつたにしても、それは、連合政權の全體ではなく、その内の特定の部分の立場を代表するものであつたと考えるべきなのである。

（三） 招魂葬議

東晉王朝の草創期に干寶がその名を留めた、もう一つの事件が、招魂葬をめぐる朝廷での論争であった。すなわち、西晉末年の戦亂の中で死去し、その遺骸も失われてしまった人物を、その魂だけ招き寄せて、葬儀を行なってよいものかどうかという論争である。建武二年（三一八）の年始め、招魂葬の可否をめぐる議論がたかまり、その年の三月、司馬睿が即位して元帝を名のり、太興と改元されたあと、招魂葬を禁止する命令が出された。

この論争の背後には、東海王司馬越の姿が見え隠れしている。「晉書」卷五九、東海孝獻王越傳によって、司馬越の死の前後の事情を記せば、次のように纏めることができる。

司馬越は、都をおびやかしている石勒を討伐するという名目で、文武百官と四萬の軍を率いて都を出ると、項の地に根據地を定めた。そこから羽檄を四方に送って、行動を共にする勢力を募ったが、期待していた人材は、まったく集まらなかった。司馬越は、自分の思いどおりに事が運ばず、朝廷ではかれを討伐すべきだとの意見が通ったりしたことが重なって、失意と懼れのあまり病氣になり、永嘉五年の三月に死去した。襄陽王の司馬範がかわって指揮を取り、司馬越の柩を守って東海國に歸ろうとした。その途上で、石勒の軍の追撃を受けて、さんざんに打ち破られた。司馬越の柩を手に入れた石勒は、それを焚やすように命じて、「この者が天下を亂したので、わたしは天下のために報復したのだ。だから、その骨を焼いて天地に告げるのだ」と云った。都に留まっていた司馬越の妃の裴氏は、かわかされて、吳氏に賣り飛ばされていたのであるが、太興年間になって、やっと江南へ渡ることができた。その裴氏が、遺骸の失われた司馬越のために、魂だけを招いて、葬儀を行ないたいと望んだのである。

司馬越の妃の裴氏が江南へやって來たのは、太興年間のことだとされている。もし、その年代が正しいとすれば、建武

二年の年頭に行なわれた招魂葬をめぐる議論は、司馬越の遺骸が失われたことと、必ずしも関係がなかったことになりそうである。しかし、次に引く一連の議論の内容から見て、やはり、この時の議論も、その背景で、死んだ司馬越をいかに祀るかという問題とつながりあっていたと考えられるのである。

この時の、招魂葬をめぐる議論については、杜佑「通典」の卷一〇三、招魂葬議と題された部分に、主要な資料が集められている。その最初に挙げられているのが、建武二年にたてまつられた、袁瓌の、招魂喪を禁じてほしいという上表である。袁瓌は、次のように云っている。⁽²⁷⁾

もとの尙書僕射の曹馥は、戦亂の中で死去いたしました。その孫の曹胤は、曹馥の遺骸が見つけれないことから、魂を招いて殯禮と葬儀とを行ないました。伏して愚考いたしますに、聖人が禮を定められたのは、人の心情に依りつつ規律を作られたものであつて、それゆえ梓によって棺のまわりを圍み、棺によって身體のまわりを圍むのであります。そうであれば、身體のないところに棺はなく、棺のないところに梓はないはずです。「しかるに」曹胤は、遺骸もないのに埋葬を行ない、「その墓へ」幽魂の氣を招き寄せました。これは、徳という點では道義にはずれ、禮という點でも他に例のないものです。監軍の王崇と太傅司馬の劉洽とに對しても、それぞれに招魂葬が行なわれました。どうか朝廷より「招魂喪を」禁斷する命令を下されますように。

博士の阮放、傳純、張亮らも袁瓌の上表に賛同する意見を述べた。同年、元帝が正式に即位をし、改元して、元興元年となつてから、太常の役所で議論を詰めるようにとの詔書が下された。當時、儒學の第一人者と認められていた賀循も、袁瓌の上表を認めて、今後、招魂葬を禁絶して、それに違犯した者は、禮の規定によって處罰をされるようにとの上啓を行なつた。そのため、招魂葬は公式に禁止されたのである。

このように、この時、多くの者が招魂葬を禁ずるべきだとの意見を表明している。ここで禮のおきてに違犯するとされ

ている招魂葬とは、招魂を行なって死者の靈を祀ること自體ではなく、遺骸もないのに、あたかもそれがあるようにして殯禮や葬儀を行ない、墓を作り、そこへ死者の靈魂を招き寄せて埋葬をすることであった。

招魂葬を行なったとされている曹馥と劉洽との二人は、「晉書」司馬越傳に「司馬越は、東海中尉の劉洽を左司馬に、尙書の曹馥を軍師に任じた」とあるように、ともに司馬越の側近であつて、恐らくは永嘉五年、項の地での虐殺の際に殺され、遺骸が回収できなかったという事情があつたのであろう。同じく招魂葬を行なったとされている、監軍の王崇は、木島史雄氏によれば、徐州監軍の王隆のことであつて、かれも西晉末年の戦亂の中で死去したと推定される。すなわち、曹馥と劉洽との例が問題となつていゝるうちに、招魂葬議といふのは、單に西晉末年の混亂の中で死亡し、その遺骸を回収できなかった人々の葬儀をどのように行なうかといふ一般的な問題ではなかつた。東海王司馬越のもとにいた人々の處遇にも關わる、きわめて政治的な問題であつたと推測されるのである。司馬越の帝位篡奪の意圖が明らかになつた時、懷帝は、かれの討伐を命じている。司馬越は、西晉王朝にとつて、反逆者なのであつた。しかし一方では、司馬睿（元帝）は、司馬越の手先きとして、勢力をつちかつたといつた前歴があり、司馬越の「三窟」の一つとして設置された司馬睿の幕府には、東海王と親密な關係を持つ人々が多かつたに違ひない。問題は複雑にならざるを得なかつたのである。

「通典」は、續けて荀組、王裳、荀奕らの議論を紹介する。かれらの議論も、上に引いた袁瓌の上表に賛同するものであるが、その論の中に、招魂葬推進派の意見が引用されていて、推進派がその主張の論據としたところが窺われる。招魂葬を行なつてさしつかえないとする人々が擧げるのは、「楚辭」の中に屈原の招魂のことが見えること、漢代には新野公主の招魂葬が、魏時代には郭循の招魂葬が行なわれたといふ過去の例があること、「周易」に「鬼を車に載せた」といふ句があること、昇仙した黃帝に墳墓があるのはその神（靈魂）を祀つたものであること、墓中に靈座が設けられるのは墓の中に靈を藏するためのものであること、などの點であつた。

以上に舉げた議論が、少なくとも直接には司馬越の葬儀に關する論争ではなかったのに對して、干寶が「駁招魂葬議」を提出したのは、裴妃が江南に渡り、司馬越自身の葬儀が政治的な問題となつてからのことであつたらう。干寶は、次のように論じている。⁽²⁰⁾

「これまでも」時に、招魂葬が行なわれることはあつたが、招魂葬のことは、經書やその古典的な注釋をひもといても、それへの言及はない。最近の例では、太傅公(司馬越)が、戰亂の中にあつて、遺骸を納めた柩を回收することができなかった。その當時、荀奕が招魂葬について「それに反對する」議論を行ない、かつて東海國の學官で、現在は魯國にある周生が招魂葬を是として、そのために大々的な論陣を張つたが、その議論の大部分が證據のないものであると述べた。

わたくし、干寶が考えるに、人が死すると、神(靈魂)は上昇して天に歸り、形(身體)は沈んで大地に歸る。だから、宗廟を作つてその神を招き、「一方」衣衾によつてその形をくるみ(すなわち斂の儀禮を行ない)、棺をその衣衾の外側にめぐらせ、椁を棺の外側にめぐらせる。しかるに、形(遺骸)が遠方の土地で失われたのに、こちらに塚を作り墓室を設けようとしているのは、失われたもの(遺骸)を假に存するとはできないことが分かつておりながら、有りもしないものを、偽つて有ることが可能だとするものである。「そうしたことをする代わりに」禍いに遭つた場所へゆき、神を迎える儀禮を正しく行ない、その神を宗廟に安置し、哀敬の氣持ちを、宗廟に收まつた神に向かつて盡くすべきなのである。

周生の議論に云う、魂堂と几筵とを墓室の中に設けるのは、「墓室には」單に遺骸を收めるのみならず、そのようにして神をも迎えているのではないか、と。

答えて云う、古人の言葉には、そもそも禮とは、具體的に行なう事柄を述べることはできても、なぜそうするのか

については、その意味を知りたい、とある。それゆえ君子が、實際の儀禮を重んじて、疑問の生じそうなところに判断を付け、人々の氣持ちに沿いつつその本旨を把握したというのは、まことに靈妙な仕事であった。だから、禮を制するにあたっては、鬼神の本性にのっとる場合もあれば、生きている者たちの氣持ちを大切にする場合もあったのである。そうしたことからすれば、墓穴において、饋席（食物をささげるムシロ）を設けるのは、元來、骸骨（遺骸）に對して捧げるものであって、魂神のためのものではなかったことになる。それに加えて、魂を棺の中に釘付けにし、神を椁の中に閉じ込め、上に昇るべき純粹なものを下降する魂の領域に居らしめ、自由に遊行すべき氣を密封された墓室の中に隠れさせてしまうといったことは、鬼神の本性に沿わず、聖人の意圖に合致したものであるはずがない。「魂を葬る」といった表現自體が、矛盾していると云つてよいのである。

周生は、また次のようにも云う、昔、黃帝が神仙となって天に昇ると、その臣下の扶微らは、黃帝の衣冠をもつて斂を行ない、殯をした後、葬儀をおこなった。これが「古く、招魂葬が行なわれたことの」證據だ、と。

答えて云う、孔子が黃帝のことを評論して、生きている間に、人々が黃帝の教化を喜ぶことが百年、死んだあと、人々が黃帝の神威を畏れることが百年、いなくなったあと、人々が黃帝の教えどおりに事を行なうことが百年であった、と云われている。この言葉からすれば、黃帝も死んだのであって、神仙となったというのは間違ひである。もし本當に神仙となつたのであれば、どうして葬儀などということが問題とならう。

干寶が反駁の對象としたのは、もとの東海國の學官であつた周生が展開する議論であつた。すなわち、ここで招魂葬が許されると主張しているのもまた、東海王司馬越の直接の關係者なのである。

木島史雄氏の前引論文も指摘するように、招魂を行なつて、墓中に魂を収めることの可否が大きな問題となつたのは、政治的な背景のほかに、この當時、古くからの、肉體は墓に納め、魂は宗廟で祀るという、神と形とを明確に分離する觀

念が次第にあいまいになって来ており、現實には、墳墓において魂を祀る儀禮が行なわれているという狀況に對應していた。⁽³⁰⁾ 招魂葬を非難する人々は、魂は宗廟で祀るべきだとする、古くからの禮の觀念を用いて反對をするのであるが、西晉末年の混亂の中で、肉親の遺骸を回収できないまま南渡をした人々の心を満足させる議論ではなかったであろう。そうでありながら、東晉の初年の朝廷で、少なからざる人々が、招魂葬に反對する意見を表明したことの背景には、當時、なお無視できぬ力を持っていた、東海王越系統の勢力に對抗する意味がこめられていただろうと推測されるのである。

田餘慶氏の議論にも詳しいように、東晉初年の司馬睿(元帝)・王導政權の原型となったのは、西晉後半期の東海國における、皇族の司馬越と琅琊の王氏に屬する王衍との協力體制であった。⁽³¹⁾ 皇族の司馬越とペアをなした貴族の王衍は、西晉時期の清談を代表する人物であり、またその政治的無節操を表明する少なからざる逸話を留めている。司馬越是、前述のように、その死後、石勒の追撃を受けて遺骸を焚かれ、王衍も、「水經注」卷二二に引く孫盛「晉陽秋」によれば、その際に射殺されたのであった。同じく、「世說新語」輕詆篇の劉孝標注に引く「晉陽秋」は、その死に臨んで、王衍が「われらが、もし浮虛の風を高く標榜したりしなければ、こんな事態にまでは至らなかったのに」と云ったと記している。こうした挿話やかれの無節操を強調する逸話(たとえば「晉書」王衍傳が記す、石勒に降伏した王衍が、石勒に向かって皇帝となるようにと勧めたといった逸話)については、西晉の滅亡の原因を清談など浮華の風俗に求める人々が、惡意をもって創作したものであったかも知れない。しかし、その全てが事實無根だったわけではなく、西晉末年の政治的な混亂をひどくしたということで、王衍はその責任を免れがたいであろう。

招魂葬が問題となった時、不贊成を表明する議論が一齊に提出されたのは、司馬睿・王導政權の中に引き繼がれている、司馬越・王衍以來の人脈への反感をこめたものであったろうか。司馬越・王衍の連合は、王衍を頭に、いわば清談派の人脈によって固められていた。それに對して、中下級士大夫階層の政治・倫理觀念を代表する儒家的禮教派を中心とする人

人によって、招魂葬を行なってよいという議論は葬られてしまったのである。この論争の背後にも、司馬睿・王導政權内部に存在した、清談派と禮教派、貴族階層と中下級士大夫階層との對立を見ることが出来るのかも知れない。そうして干寶は、ここでも、中下級士大夫階層の意見を代辯しているのである。

王導自身にとって、王衍は同じ琅瑯の王氏に屬する同族であり、特に王敦は、王衍の下に形成された名士集團である、「四友」の一人に數えられたこともあった。元帝もまた、司馬越の妃である裴氏を、江南に政權を建てるようにとの助言を受けたことで、深く徳としていたとされる（「晉書」東海王越傳）。元帝と王導にとっては、招魂葬を禁止すべきだとする朝廷での議論の大勢は、あるいは意に染まぬものであったのかも知れない。禁令が出されたにもかかわらず、裴妃が、丹陽において、司馬越の招魂葬を強行できたのも、なんらかの暗黙の了解がその背景にあったものであろう。

同じころ、もう一つ、禮をめぐる問題に關して、干寶が發言をしている。問題の起りは古くまで遡り、後漢の末年に發する。王昌の父親は、元來、長沙に住んでいて、そこに妻子があつた。その父親が上計吏として京師に出ているうちに、吳と魏との間で戦いが始まった。長沙に歸れなくなった父親は、魏に仕えて黃門郎となり、新しく妻を迎えた。新しい妻との間に生まれたのが王昌である。この王昌にとって、父親から義絶されているわけではない、父の前妻のために、いかなる種類の喪に服するべきかという問題が、吳が平定されたあとの、太康元年に提出された。この問題をめぐって、さまざまな人が表明した意見が「晉書」禮志中と「通典」卷八九とに集められている。太興初年になって、著作郎の干寶が、この古くからの禮學上の問題に對して、自分の見解を、恐らく隋志に見える「後養議」という題で、發表したのである。

王昌をはじめ、當事者がみなすでに死去してしまつていたであろう時期に、なぜ干寶が自分の見解を表明したのかについて、確かなところは分からない。ただ、「晉書」禮志にも見えるように、當時の混亂した社會のなかで、二人の母親ができるといった例は少なくなつたであらう（日本でも、敗戦のあと、苦勞して海外から引上げてきた女性が、夫のもと

へたどり着いたら、夫にはすでに別の妻がいたというような内容の新聞記事をいくつも目にしたし、また、張華が「甲乙之間」を作つて、こうした場合の處理を一般化して問うたとされており、いわば禮學上の演習問題でもあった。

干寶の「論」について、ここで詳しく紹介することは省略するが、干寶が、「禮には經があり、變があり、權がある」、また「五種類の禮が定められたのは、情を基礎にして、それを秩序づけて表明し、事態に即應するためであつた」と云つて、場合場合に應じて、それに相應しい對應をなすべきだと強調していることは、記憶に留めておいてよいであらう。王昌の例について、干寶は、生前に會つたこともなく、恩愛の情もなかつた義母に對して、母親という名があることだけで、王昌が實母に對するのと同等の喪に服するのは間違いだとする。他方、一族が集まつて祖先の祀りをする時には、父親の前の妻の位牌が、後の妻の位牌よりも前に配置されるべきだともしている。干寶は、禮學の専門家ではあつたが、禮の規定を振りかざして、現實をむりやりに古い制度の中に押し込もうとするような態度は取らなかつたのである。

ちなみに、干寶が郭璞と接觸を持ったのも、この頃のことであらう。「晉書」王隱傳には、太興の初年、東晉王朝の文物制度もやや整つたあと、王隱と郭璞とが召されて、ともに「佐」著作郎となり、「晉史」の編纂に當つたとある。干寶と郭璞とも、同僚であつた時期があつたと推定される。ただ兩者の生き方には、相當に大きな違いがあつた。「晉書」郭璞傳には、次のような挿話が見える。⁽³²⁾

明帝が東宮にあつた時（明帝司馬紹は、元帝の即位と同時に皇太子になった）、溫嶠と庾亮とに對して、ともに「身分の違いを忘れて」平民どうしのような交わりを結んだ。郭璞も、才能と學識とによつて「そのグループの中で」重んじられ、溫嶠や庾亮と變わることもない待遇を受けていた。人々は、それをすばらしいことだと評判した。しかし郭璞は、輕薄な性格で、行動を慎まず、酒をたしなみ、色を好んで、度を過ぐす場合もあつた。著作郎の干寶が、あるとき郭璞を諫めて云つた、「こうしたことは、天から與えられた『性』を調和させてゆく道ではありませんまい」。郭璞が云つ

た、「わたしが授けられた天分は〔豊かであつて〕、それを十分に用い切れないままに終わるのではないかと、いつも心配しているのだ。それなのに、あなたは酒食が害をなすことなどを心配しているのか」と。

こうした對話からも、北方から來た才華あふれる博學者で、いささか無頼の傾向のある郭璞と、南方のまじめ一點張りの學者である干寶との間の、人生觀の違いを見ることができよう。郭璞は、王敦によって殺されることになるのであるが、王敦の亂の際のかれの行動がのちに議論になっているように、郭璞は、大きな視點から云えば、北方から來た貴族派に同調する人物なのであつて、少なくとも一時期は、王敦の亂に加擔するところがあつたのであろう。

このように、東晉初年の朝廷でいくつかの自己主張をしたあと、干寶は、地方に出た。「晉書」の本傳には、次のように云う。

家が貧しいからという理由で、求めて山陰の縣令に補せられ、やがて始安太守に昇進した。

山陰は、會稽郡の縣名。始安郡は、荊州の南部、現在の桂林に郡治があつた。干寶が、みずから求めて地方官に出るについて、家が貧しいからと云っているのが本當の理由であつたのか、あるいは、かれの政治的な發言が權力者たちから忌避されたのか、それとも王隱が虞預によつて中央政府から追い出されているように、史官組織の内部でゴタゴタがあつたからなのか、そのいずれであつたのかを判斷するためには資料が十分でない。王敦の亂に際しては、干寶は、その思想からいって、王室擁護派として行動するはずであるが、その期間、かれは地方にあつた可能性が大きいであらう。

始安太守の干寶の名が見える挿話として、「晉書」隱逸傳中の翟湯傳に、次のような一條が載っている。⁽³³⁾その挿話の内容から見て、干寶が、始安郡から、はるか離れた尋陽の翟湯に物を贈つたとは考えにくいことからすれば、赴任の途中などに、尋陽に立ち寄つて、翟湯と交渉を持ったものであらうか。

翟湯は、字を道淵といい、尋陽の人である。行ないは慎重で純粹であり、高ぶることなく清廉であった。……司徒の王導が招聘したが、官位にはつかなかった。柴桑縣界の南山に隠れ住んだ。始安太守の干寶は、翟湯と姻戚關係にあったところから、船に生活物資を載せていって、それを贈ろうとした。その際、下役人に次のように命じた、「公は廉潔で謙讓だから、おまえは、手紙を渡したら、すぐに船を置いたままにしてもどって来るように」と。

翟湯は、物を返そうにも相手がいないことから、贈り物の代金分の絹を買って、それを人に託して干寶に返した。干寶は、元來、翟湯に恩恵を與えようと意圖したのであったが、かえって手敷をかけさせることになってしまった。以前にも増して、恥じ入り、その人柄に感服したのであった。

尋陽郡柴桑縣の南山（廬山のあたり）に隠れ住む翟湯と干寶とは「通家」だとあるが、どのような親戚關係にあったのかは分からない。ただ、干氏が尋陽の地となんらかの關係があったのではないかという推測は、前に述べた。

翟湯が隠れ住んだという柴桑の南山は、少し後の時代に、陶潛が眺めていた南山なのであろうか（ただ、陶潛が住んだ柴桑縣栗里から見る南山は、廬山ではありえないとする説もある）。魏晉南北朝時期の隱逸者は、けっして世に背いた、消極主義者たちではなかった。しかし、かれらの思想と政治的な立場とが、この時代の社會全體の中でいかなる機能を果たしたのかについては、まだ十分に解明されていないように見える。ただ、この挿話からも、隱逸という處世が、干寶の儒家的立場とは、異質なものであったことが示唆される。郭璞に對する場合と同様に、干寶が、生き方の異なる人に、いらぬおせっかいを焼いたものだと言えるかも知れない。もちろん、干寶自身には、そうしたおせっかいな行動を取る必然性があったのであろうが。

王導は、司徒になったあと、おそらくそのころまでずっと地方にあったのであろう干寶を呼びもどして、司徒府の右長史の任につけた。右長史の官は、司徒の幕府の中では、左長史に次ぐ重職である。「晉書」干寶傳には、次のようにいう。

王導は、朝廷に申し出て、干寶を司徒右長史とした。

王導が司徒となったのは、明帝の太寧元年（三二三）のことであった。「建康實錄」の太寧元年の三月の條には、次のようにある。⁽³⁴⁾

王敦は、篡奪を謀ろうとし、「その下準備として」朝廷に匂わせて自分を召し寄せるようしむけた。明帝は、手ずから書いた詔によって王敦を招いた。王敦は、長江を下って於湖にその軍隊を駐めた。帝は、そこで司空の王導の官職を移して司徒とした。王敦は、勝手に揚州の牧を領した。

この前年、永昌元年の正月に、王敦は、武昌で反亂の軍を舉げた。元帝側近の劉隗らを除くことを舉兵の理由としてである。四月には、王敦の軍が建康に隣接する石頭城に入って、元帝は妥協を餘儀なくされる。王敦は、みずから丞相を名のり、元帝側近の戴若思や周顗を殺す。こうした中で、その年の閏十一月、元帝が死去すると、その長子の司馬紹が帝位に即いた。これが東晉二代目の皇帝、明帝である。次の年の三月に改元が行なわれて、太寧元年となり、「晉書」明帝紀によれば、その四月に、王敦の意志で、王導は司空から司徒に轉じられたのであった。

さらにその次の年、太寧二年には、明帝側の反撃體制が調い、七月、明帝自身が六軍を指揮して陣頭に臨み、王敦の軍に大きな打撃を与えると、王敦は、憤りの中で死んだ。王敦の反亂の後始末もはぼついた、その年の十月に、司徒の王導は太保に任ぜられ、司徒太宰を兼任することとなった。さらに後のこと、「晉書」成帝紀、咸康四年（三三八）の五月の條には、司徒の王導を太傅となすとあり、同年六月には、司徒を改めて丞相として、太傅の王導をこれにあてたとの記事が見える。すなわち、晩年の王導は、ずっと司徒の幕府を開いていたのであり、干寶がいつ、その幕府に招かれたのか、その正確な年代を限定することはむづかしい。

干寶が、この司徒府にあって著したのが「司徒儀」であった。「南齊書」百官志の司空の條には、次のように云って

(35)
いる。

晉の時代、王導が司徒となると、右長史の干寶が、官府の職儀を撰立した。

この撰立したという表現からすれば、干寶が、司徒府の職儀（職務規定）を新しく定め直して、それを書物の形にしたということであろうか。この職儀が、「隋書」經籍志、史部職官類に見える「干寶司徒儀一卷」であり、兩「唐書」經籍・藝文志には「干寶司徒儀注五卷」として著録されている。ちなみに、兩唐志の史部儀注類には、「雜議五卷、干寶撰」という書物も見えている。

儀注というのは、元來は儀禮や公的な行事の式次第のことで、「周禮」春官の大史が手に持って儀禮の進行を指揮する「禮書」とつながるものだ⁽³⁶⁾とされる。干寶が司徒府の儀注を確定して、それを書物の形にしたのは、恐らく、かれの「周禮」研究とも關わりとあるところがあったのであろう。「隋書」經籍志、經部禮類には、「周官經十二卷 干寶撰」という書物が著録されている（兩唐志も同じ）。これは干寶が「周禮」に附けた注釋であるが、この書物も散逸してしまつて、馬國翰の「玉函山房輯逸書」などに、その輯本が納められている。

干寶の「周禮注」について、その學問的傾向を窺うに足るほどの量の佚文は遺っていない。ただ、たとえば小宰の職について「小宰は、今の御史中丞のようなものだ」と説明するなど、今の何々に當たるといった注釋がいくつも見えている。しかし、こうした特徴も、干寶獨自のものと云うよりも、漢代以來の「周禮」注の傳統を引き繼いだものであった（王應麟「漢制考」を参照）。また、「周禮」六官のそれぞれの冒頭に一括して置かれている「序官」の文章を、干寶は、ばらばらに分けて、それぞれの官ごとの「職文」の前に冠したとされる⁽³⁷⁾。古い形式を守るよりも、讀者の理解を助けるためにさまざまな工夫をする、實用主義的な古典注釋者の姿を、そこに見ることができであろう。

なお、干寶の「周禮」解釋と關連して、隋志、兩唐志には「周官禮駁難」という書物が著録されている。隋志に附けら

れた注から、孫略が問題を提起し、干寶が反論を加え、そうした議論を虞喜がまとめた著作であったことが知られる。姚振宗「隋書經籍志考證」は、問題を提出したとされる孫略が、虞預の女婿であったことを指摘している。虞喜は、會稽の虞氏に屬し、虞預の兄である。前に指摘したように、東晉の初年、史官の内部において、王隱と虞預との間に對立があったと推定されるのであるが、この書物の存在は、干寶が虞預の側に親密であったことを示すものかも知れない。

また、この王導の司徒府で、干寶は、抱朴子葛洪と知りあったと推測される。「晉書」葛洪傳には、次のように云っている。⁽³⁸⁾

葛洪は、字を稚川といい、丹楊郡の句容の人である。祖父の葛系は、吳の大鴻臚となり、父親の葛悌は、吳が平定されたあと、晉に出仕して、邵陵太守となった。

葛洪は、若くして學問を好み、家が貧しかったことから、みずから薪を伐って、その駄賃で紙や筆を買い、夜ごと、書物を抄寫し讀誦した。このようにして、儒學でかれの名が知られるようになった。……

咸和（三二六～三三四）の初年、司徒の王導が、葛洪を招いて揚州の主簿に補し、そこから司徒掾に轉じ、諮議參軍に昇進した。干寶が、かれと深い友情を結んでいて、葛洪の才能は國史の任にたえたと推薦したところから、選ばれて散騎常侍となり、大著作を兼任するようにとの任命を受けた。葛洪は固辭して、その役目につかなかった。

葛洪と干寶とは、先祖がともに吳王朝に仕えた、江南の中小世族の出身であり、葛洪の「抱朴子」の、特に外篇には、干寶の思想の脚注ともなるであろう記述が少なくない。干寶と葛洪との友情は、葛洪が神仙術を究めるため、廣州へ出發することになって、途絶えることとなった。あるいは逆に、干寶の死後に、葛洪は建康を離れたのかも知れない。葛洪が廣州の羅浮山にむかったのは三三〇年代のことで、羅浮山で死んだのは建元元年（三四三）だと推定されている。⁽³⁹⁾

干寶は、司徒府の右長史から散騎常侍に昇進したと考えられるが、その昇進の年代も、正確には分からない。「晉中興

書」に、「干寶は、散騎常侍として著作を兼任した」とあることからすれば、干寶は、最後まで史官の任にあったのである。

また、唐代の「道宣律師感通錄」には、

わたしが昔に讀んだ、晉の太常干寶が著わした「搜神錄」には、晉のものとの中牟縣令の蘇詔ことを述べて……とあった。

と云い、干寶（干寶）が太常にもなったらしいことが窺われる。また「唐高僧傳」卷十三の釋慧因傳にも、慧因が晉の太常であった干寶の子孫であると記されている。「感通錄」で道宣が「搜神錄」を引用する際の表現からすれば、原本の「搜神記」（搜神錄）には、太常の干寶撰という標題があったものであろうか。もしそうであれば、「搜神記」の完成の時期は、かれが太常だった時期だということにもなりそうなのであるが、干寶が太常であった期間を特定することは、残念ながらできない。あるいは、太常の稱號は、死後に與えられた贈官であったのかも知れない。

干寶が死去したのは、「建康實錄」によれば、成帝の咸康二年（三三六）のことであった。同年の三月の條には、干寶の死去を記すとともに、その略歴を述べて、次のように云っている。

三月、散騎常侍の干寶が卒した。

干寶は、字を令升といい、新蔡の人。若くから學問につとめた。中宗（元帝）が即位をすると、國史を兼任し、昇進をかさねて散騎常侍となった。かれは「晉紀」を編纂した。さかのぼって宣帝から建興年間まで、五十三年のことを述べて、二十卷の書物にした。言葉は簡潔で要點を押さえており、視點は眞つ直ぐであるが情理を盡くしている。世の人々は立派な史官だと稱賛した。

續けて「搜神記」編纂の動機だとされる、怪異事件のことが述べられているが、ここでは省略に従う。

干寶の没年については、他に記録がなく、唐代に「建康實錄」が編纂されるに際し、干寶の没年を記すについて、確かな據りどころがあったのかどうか、疑えなくもない。しかし「建康實錄」には、他にも同様の、據り所の知られぬ記述が少なくないが、それらを一概に疑問視することもできないようである。この干寶の没年についても、ひとまずこの記録を信じることができるのではないかと思う。

干寶には、以上に取り擧げて來た著作の外に、「隋書」經籍志の子部儒家類に著録される「干子」十八卷、と、同じく經籍志の集部別集類の見える「晉散騎常侍干寶集」四卷とがあった。「干子」は、思想的な著述で、兩「唐書」に著録される、干寶「正言」十卷と「立言」十卷とが、これに重なるのであろう。「玉函山房輯佚書」とその續編とが「干子」の復元を試みているが、たしかに「干子」に由來すると考えられる佚文は、ほとんど遺っていない。

干寶の文集である「晉散騎常侍干寶集」も、早く散逸して、かれの詩や文の實作がいかなるものであったのかを窺うのは難しい。干寶は、彼自身の別集があったほかに、また、「百志詩（集）」と呼ぶ詩集を編纂しており、「隋書」經籍志、集部の總集類に、九卷の「百志詩」が著録されている。「隋志」では總集類に分類されているが、應璩の「百一詩」などと同様に、干寶自身の、一つの主題をめぐる連作詩を纏めたものであったろうか。九卷という大きな卷數を持った作品であったが、梁代から唐代のころには五卷になり、やがて散逸してしまった。「太平御覽」卷三五六に引かれて、わずかに遺った「百志詩」の斷片は、かれの生き方と關連して、興味深い。次のような内容である。

壯士稟傑姿

壯士は、萬人に拔きん出た資質を天より授かり

氣烈有自然

烈たる氣慨は、その内實より發するものだ

俯仰群集中

人々の間で、右顧左眄しているような者に

胡能救世艱

なんで世の艱難を救うことなどできよう

閱輩代縫腋

上等の毛皮のコートの代わりに革の鎧を着け

兜髻易進賢

進賢冠に替えて、兜をかぶった

この詩は完全なものではなく、一つの詩の最初の部分だけが遺されたものようであるが、「百志詩」というのは、こうした詩、百篇で成り立っていたのであろうか。干寶の『志』というのが、武人的な價值觀に支えられたものであったことが、この詩からも確かめられよう。

以上に、あまり豊富とは云えない資料に據り、いくつかの推測をまじえつつ、西晉後半期から東晉初年の、混亂の時代を生きた干寶の生涯の復元を試みた。その生涯を通して見るとき、干寶は、この時代を、自分が信奉する一つの原則を貫いて生きたと云えるのではないだろうか。

注

(1) 「晉書」卷八二、干寶傳(テキストは、「晉書斟注」本による)

干寶、字令升、新蔡人也、祖統、吳奮武將軍、都亭侯、父瑩、丹楊丞、寶少勤學、博覽書記、以才器召爲「佐」著作郎、平杜弢有功、賜爵關內侯、中興卽創、未置史官、中書監王導上疏曰……宜備史官、敕佐著作郎干寶等、漸就撰集、元帝納焉、寶於是始領國史、以家貧求補山陰令、遷始安太守、王導請爲司徒右長史、遷散騎常侍、著晉紀、自宣帝訖于愍帝五十二年、凡三十卷、奏之、其書簡略、直而能婉、咸稱良史

(2) 羅大經「鶴林玉露」卷三(王瑞來「點校」本、一九八三年、中華書局、による)

楊誠齋在館中、與同舍談及晉干寶、一吏進曰、乃干寶、非于也、問何以知之、吏取韻書以呈、干字下注云、晉有干寶、誠齋大喜曰、汝乃吾

一字之師

なお、干姓と于姓については、「雲谷雜紀」卷二も参照。

(3) 干寶「晉紀」(「三國志」卷二十八裴松之注)

「誕應下」數百人、拱手爲列、每斬一人、輒降之、竟不變、至盡、時人比之田橫、吳將于銓曰、大丈夫受命其主、以兵救人、既不能克、又束手於敵、吾弗取也、乃免胄、冒陣而死

(4) 狩野直禎「干寶とその周邊——江南文化の一考察」古代學 十八一、一九七二年、を参照。

(5) 劉知幾「史通」外篇史官建置一(浦起龍「通釋」本のテキストによる)

當魏太和中、始置著作郎、職隸中書、其官卽周之左史也、晉元康初、又職隸祕書、著作郎一人、謂之大著作、專掌史任、又置佐著作郎八人、宋齊已來、以佐名施於作下、舊事、佐著作職知博採、正郎實以草傳、如正佐有失、則祕書監思其憂、其有才堪撰述、學綜文史、雖居他官、或兼領著作、亦有雖爲祕書監、而仍領著作郎者、若中朝之華嶠、陳

壽、陸機、束皙、江左之王隱、虞預、干寶、孫盛、宋之徐爰、蘇寶生、梁之沈約、裴子野、斯竝史官之尤美、著作之妙選也

(6) 「晉書」卷六十一、華軼傳

華軼、字彥夏、平原人、魏太尉華歆之曾孫也、祖表太中大夫、父澹河南尹、軼有才氣、聞於當世……永嘉中、歷振威將軍、江州刺史、雖逢喪亂、每崇典禮、置儒林祭酒、以弘道訓……時洛京尚存、不能祇承元帝教命、郡縣多諫之、軼不納曰、吾欲見詔書耳、時帝遣揚烈將軍周訪、率眾屯彭澤以備軼、訪過姑熟、著作郎干寶見而問之、訪曰、大府受分、今屯彭澤、彭澤江州西門也、華彥夏有憂天下之誠、而不欲碌碌受人控御、頃來紛紜、粗有嫌隙……既而帝承制、改易長吏、軼又不從命、於是遣左將軍王敦、都督甘卓、周訪、宋典、趙誘等討之

(7) 王隱「晉書」〔御覽〕卷二五六

華軼爲江州刺史、得江表之歡心、流亡之士、赴之如歸、時天子孤危、四方瓦解、軼有匡天下之志、每遣貢獻入洛、不失臣節、謂使者曰、若洛都道斷、可輸之琅耶王、以明吾之爲司馬氏也

(8) 「晉書」卷五十八、周訪傳

周訪、字士達、本汝南安城人也、漢末避地江南……吳平、因家廬江尋陽焉、祖纂、吳威遠將軍、父敏、左中郎將……爲縣功曹、時陶侃爲散吏、訪薦爲主簿、相與結友、以女妻侃子瞻……及元帝渡江、命參鎮東軍事……尋以爲揚烈將軍、領兵一千二百、屯尋陽鄂陵、與甘卓、趙誘討華軼……軼衆潰、訪執軼斬之、遂平江州……復命訪與諸軍共征杜弢

(9) 「晉書」卷六十六、陶侃傳

帝使侃擊杜弢、令振威將軍周訪、廣武將軍趙秀、受侃節度、侃令二將爲前鋒

(10) 陳寅恪「述東晉王導之功業」〔《金明館叢稿初編》上海古籍出版社〕

(11) 「晉書」卷五十二、華譚傳

華譚、字令思、廣陵人也、祖融、吳左將軍、錄尚書事、父譚吳黃門郎

……譚至洛陽、武帝親策之……又策曰、吳蜀恃險、今既蕩平、蜀人服化、無攜貳之心、而吳人越區、屢作妖寇……對曰……所安之計、當先籌其人士、使雲翔鳳闕、進其賢才、待以異禮……譚素以才學爲東土所推……又舉寒族周訪爲孝廉……建興初、元帝命爲鎮東軍諮祭酒、譚博學多通、在府無事、乃著書三十卷、名曰辨道……轉丞相軍諮祭酒、領郡大中正、譚薦干寶、范瑛於朝、乃上牋求退

(12) 干寶「晉紀」〔御覽〕卷八二七

〔琅邪王逐周馥〕、華譚依周馥、及琅邪王遣甘卓攻馥、譚先於卓有恩、卓募人入城求譚、入者至舍、問華侯在不、吾甘揚威使也、譚曰、不知華侯所在、抽絹二疋授之、使人還以告、卓曰、是華侯也

(13) 「建康實錄」卷五（張忱石「點校」本、一九八六年、中華書局）

多十一月……初置史官、立太學、以干寶、王隱領國史

(14) 王導上疏「晉書」卷八二、干寶傳

夫帝王之迹、莫不必書、著爲令典、垂之無窮、宣皇帝廓定四海、武皇帝受禪於魏、至德大勳、等蹤上聖、而紀傳不存於王府、德音未被乎管弦、陛下聖明、當中興之盛、宜建立國史、撰集帝紀、上敷祖宗之烈、下紀佐命之勳、務以實錄、爲後代之準

(15) 何法盛「晉書」〔文選〕卷四九、干寶晉紀論晉武帝革命、李善注

干寶、字令升、新蔡人、始以尚書郎領國史、遷散騎常侍、卒、撰晉紀、起宣帝、訖愍五十二年、評論切中、咸稱善之

(16) 「史通」內篇載言第三

昔干寶撰晉史、以爲宜準丘明、其臣下委曲、仍爲譜注、於時議者莫不宗之

(17) 「史通」內篇二體第二

晉世干寶著書、乃盛譽丘明而深抑子長、其義云、能以三十卷之約、括襄二百四十年之事、靡有遺也、尋其此說、可謂勁挺之詞乎

(18) 「史通」外篇申左第五

至晉太康年中、汲冢獲書、全同左氏、故束皙云、若使此書出於漢世、

劉歆不作五原太守矣、於是摯虞、束皙引其義以相明、王接、荀顗(最)取其文以相證、杜預申以注釋、干寶藉爲師範

(19) 「北堂書鈔」卷六八、屬一百三十八(孔廣陶校註本)

干寶晉紀云、王導爲司徒、置西屬一人、佐長史參定九品

(20) 干寶「晉紀」(「御覽」卷七八五)

干寶晉紀曰、武陵長沙郡夷、繁瓠之後、雜處五服之內、憑山阻險、每常爲獠雜、魚肉而歸、以祭繁瓠、俗稱赤髓橫裙子孫

(21) 竹田晃「干寶試論——晉紀と搜神記の間」東京支那學報 第十一號、一九六五年、尾崎康「干寶晉紀考」斯道文庫論集 第八輯、一九七〇年、などを参照。

(22) 干寶「晉紀」(「三國志」卷二十八裴注)

凌至項、見賈逵祠在水側、凌呼曰、賈梁道、王凌固忠於魏之社稷者、惟爾有神知之、其年八月、太傅有疾、夢凌達爲癘、甚惡之、遂薨

(23) 干寶「晉紀」(「世說新語」賢媛第十九、劉注)

經正直、不忠於我、故誅之

(24) 干寶「晉紀」(「三國志」魏書第二二、陳泰傳裴注)

高貴鄉公之殺、司馬文王會朝臣謀其故、太常陳泰不至、使其舅荀顗召之、顗至、告以可否、泰曰、世之論者以泰方於舅、今舅不如泰也、子弟內外咸共逼之、垂涕而入、王待之曲室、謂曰、玄伯、卿何以處我、對曰、誅賈充以謝天下、文王曰、爲我更思其次、泰曰、泰言惟有進於此、不知其次、文王乃不更言

(25) 「史通」內篇模擬第二八

左傳云、邢遷如歸、衛國忘亡、言上下安堵、不失舊物也、如孫皓暴虐人不聊生、晉師是討、後予相怨、而干寶晉紀云、吳國既滅、江外忘亡、豈江外安典午之善政、同歸命之未滅乎、以此擬左氏、所謂貌同而心異也

(26) 干寶「晉紀」(「三國志」吳書六、宗室傳裴注)

秀在晉朝、初聞皓降、群臣畢賀、秀稱疾不與、南向流涕曰、昔討逆、

弱冠以一校尉創業、今後主、舉江南而棄之、宗廟山陵、於此爲墟、悠悠蒼天、此何人哉、朝廷美之

(27) 「通典」卷一〇三、招魂葬議(一九七八年、大化書局景印本)

東晉元帝建武二年、袁瓌上禁招魂葬表云、故尚書僕射曹覆沒於寇亂、嫡孫胤不得葬屍、招魂殯葬、伏惟聖人制禮、因情作教、故梓周於棺、棺周於身、然則非身無棺、非棺無梓也、胤無喪而葬、招魂魂氣、於德爲愆義、於禮爲不物、監軍王崇、太傅司馬劉洽、皆招魂葬、請臺下禁斷

(28) 木島史雄「招魂をめぐる禮俗と禮學」(中國思想史研究十三號、一九九〇年)は、唐の玄宗李隆基の諱を避けて、王隆が王崇と書き替へられたのであろうとする。

(29) 干寶「駁招魂葬議」(「通典」卷一〇三)

時有招魂葬、考之經傳、則無聞焉、近太傅公、既屬寇亂、屍柩不反、時突議招魂葬、東海國學官、今魯國周生以爲宜爾、盛陳其議、皆多無證、實(實)以爲、人死、神浮歸天(大)、形沈歸地、故爲宗廟、以賓其神、衣衾以表其形、棺周於衣、槨周於棺、今失形於彼、穿塚於此、知亡者不可以假存、而無者獨可以僞有哉、未若之遭禍之地、備迎神之禮、宗廟以安之、哀敬以盡之、周生議云、魂堂几筵、設于寢寢、豈唯斂屍、亦以迎神也、答(者)曰、古人有言、夫禮者、其事可陳也、其義難知也、是以君子重於義禮、夫別嫌明疑、原情得旨者、不亦微乎、故其爲制、有以順鬼神之神性、有以達生者之情、然則塚壙之間有饋席、本施骸骨、未有爲魂神也、若乃釘魂於棺、閉神於槨、居浮精於沈魄之域、匿遊氣於壅塞之室、豈順鬼神之神性、而合聖人之意乎、則葬魂之名、亦幾於逆矣、周生又云、昔黃帝體仙登遐、其臣扶微等、斂其衣冠、殯而葬焉、則其證也、答曰、孔子論黃帝曰、生而人利其化百年、死而人畏其神百年、亡而人用其教百年、此黃帝亦死、言仙謬也、就使必仙、何議於葬

(30) 漢代における、葬送儀禮に関する基本觀念の變化については、小南一

- (31) 郎「漢代の祖靈觀念」東方學報（京都）六六冊、一九九四年、を参照。
田餘慶「釋『王與馬共天下』」《東晉門閥政治》北京大學出版社、一九八九年、所收
- (32) 「晉書」卷七二、郭璞傳
明帝之在東宮、與溫嶠庾亮並有布衣之好、璞亦以才學見重、埒於嶠亮、論者美之、然性輕易、不修威儀、嗜酒好色、時或過度、著作郎干寶常誡之曰、此非適性之道也、璞曰、吾所受有本限、用之恆恐不得盡、卿乃憂酒食之爲患乎
同様の内容の記事は、「世說新語」文學篇の劉孝標注に引く「郭璞別傳」にも見える。
- (33) 「晉書」卷九四、翟湯傳
湯、字道淵、尋陽人、篤行純素、仁讓廉潔……司徒王導辟、不就、隱於縣界南山、始安太守干寶、與湯通家、遣船餉之、敕吏云、翟公廉讓、卿致書訖、便委船還、湯無人反致、乃貨易絹物、因寄還寶、寶本以爲惠而更煩之、益愧嘆焉
- (34) 「建康」實錄卷六、太寧元年
敦將謀篡奪、諷朝廷徵己、帝手詔徵之、敦下屯於湖陰、帝乃轉司空導爲司徒、敦自領揚州牧
- (35) 「南齊書」百官志一六
司徒府領天下州郡名數戶口簿籍……晉世王導爲司徒、右長史干寶撰立官府職儀
- (36) 「周禮」春官大史「祭之日、執書以次位常」賈疏
言執書者、謂執行祭禮之書、若今儀注
- (37) 「經典釋文」卷八（周禮音義上）
〔宮正〕此以下、鄭總列六十職序、干注則各於其職前列之
- (38) 「晉書」卷七二、葛洪傳
葛洪、字稚川、丹楊句容人也、祖系、吳大鴻臚、父悌、吳平後入晉、爲邵陵太守、洪少好學、家貧、躬自伐薪、以貿紙筆、夜輒寫書誦習、
- (39) 「道宣律師感通錄」（大正藏經卷五二、四三五A）
余曾見晉太常干寶撰搜神錄、述晉故中牟令蘇詔有才識、感冥中……
- (40) 「建康實錄」卷七、咸康二年
三月、散騎常侍干寶卒、寶字令升、新蔡人、少勤學、中宗卽位、以領國史、累遷散騎常侍、修晉紀、上自宣帝、訖于建興、凡五十三年、成二十卷、辭簡理要、直而能婉、世稱良史
- (41) 乃、許嵩が「建康實錄」を編纂するに際して、いかなる資料を用いたのかについては、張忱石校點本『建康實錄』（中華書局、一九八六年）の校點説明の部分に、その検討がある。また、「建康實錄」の諸本の關係については、段森健介「上海圖書館藏鈔本建康實錄考」（德島大學總合科學部紀要五、人文・藝術研究篇、一九九二年）を参考。
- (42) 應璩「百一詩」が、單に情念を表白する詩であるに止まらなかったこと、吉川幸次郎「應璩の百一詩について」（『全集』卷七）に詳しい。
干寶「百志詩」にも、寓意的要素が强かったと推測される。